



Sado Gold and Silver Mine

Research Report on Kajiyashiki remains・Seriba remains

Research Report on Excavation Activities Associated with
Roadway Improvement of Route Shizudaira-Nishimikawa

2009

Sado City Board of Education
(Niigata Prefecture)

佐
渡
金
銀
山
カ
ジ
屋
敷
遺
跡
・
せ
り
ば
遺
跡
調
査
報
告
書

二
〇
〇
九

新
潟
県
佐
渡
市
教
育
委
員
会

佐渡金銀山

カジ屋敷遺跡・せりば遺跡調査報告書

一般県道静平西三川線改良事業発掘調査報告書

2009

新潟県佐渡市教育委員会

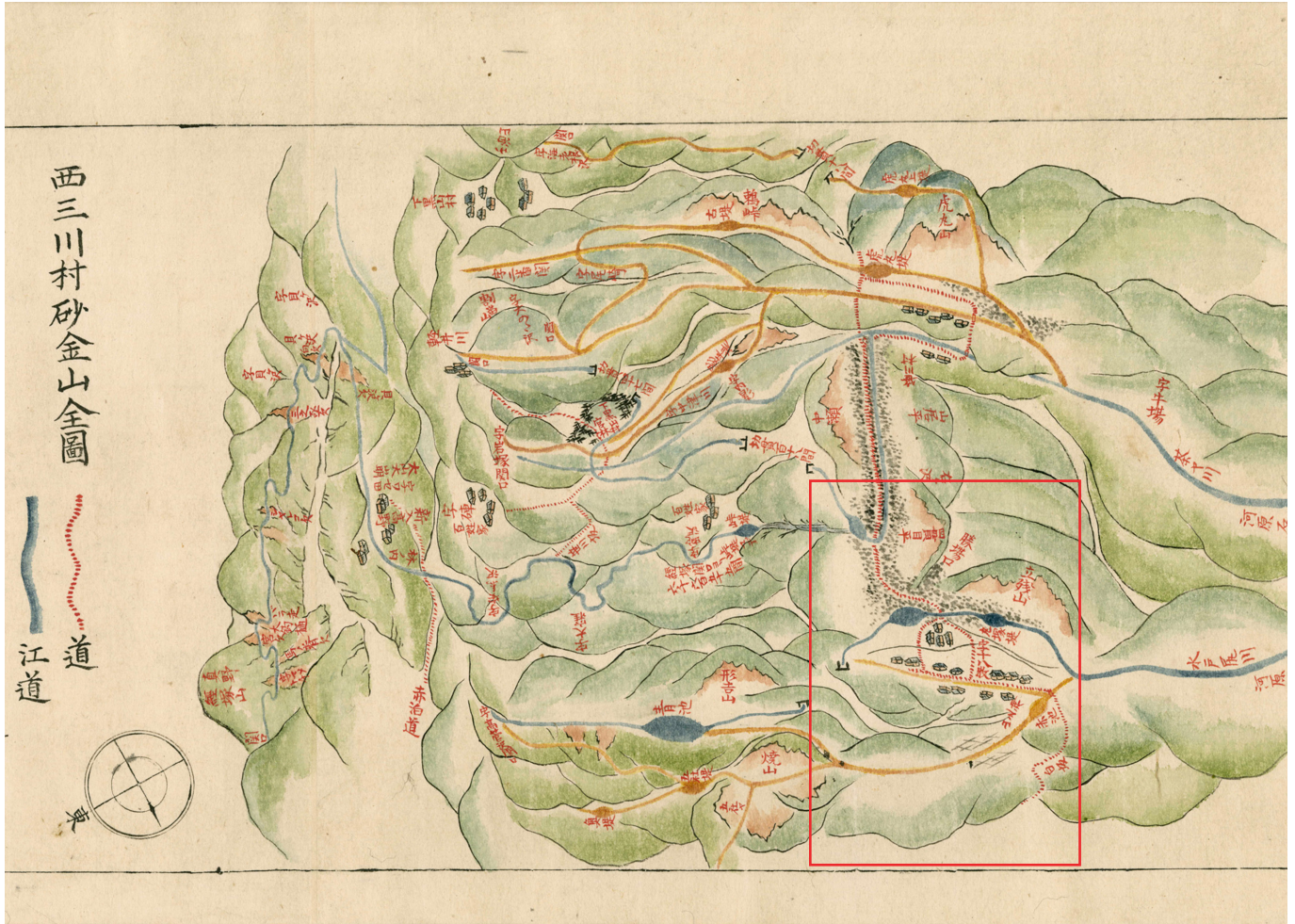
佐渡金銀山

カジ屋敷遺跡・せりば遺跡調査報告書

一般県道静平西三川線改良事業発掘調査報告書



西三川砂金山笹川地区（北西から）H 20 空撮



西三川砂金山全圖 (年代不詳 個人蔵)

序

静平西三川線は静平から西三川へ至る県道で、笹川集落内の道路としても重要なものです。

本書は、この道路改良工事に先立ち、平成18・19年度に実施した西三川砂金山（カジ屋敷遺跡・せりば遺跡）の発掘調査報告書です。調査の結果、砂金採掘に伴う水路と考えられる遺構や、山を切り崩した際のガラ石の堆積等が検出されました。このことは、先に実施した一次・二次調査の結果と併せ、従来絵図等でしか知り得なかった西三川砂金山の実態を明らかにする上で大きな成果と言えましょう。また、このような地道な調査を積み重ねていくことが大切であると考えます。

本書が地域の歴史を解明するための資料として広く活用され、埋蔵文化財に対する理解を深める一助となれば幸いです。

最後に、発掘調査から報告書刊行に至るまで多大な御指導と御協力を賜りました文化庁、独立行政法人奈良文化財研究所、新潟県教育庁文化行政課、新潟県佐渡地域振興局並びに笹川集落の皆様方に厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

佐渡市教育委員会

教育長 渡 邊 剛 忠

例 言

- 1 本書は新潟県佐渡市西三川240番地他に所在するカジ屋敷遺跡、西三川391番地他に所在するせりば遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は一般県道静平西三川線改良工事に伴い、佐渡市教育委員会が調査主体となり、平成18・19年度に実施した。
- 3 整理および報告書作成にかかる作業は、平成20年度に佐渡市教育委員会が行った。
- 4 調査及び整理に係る経費については、新潟県佐渡地域振興局が負担した。
- 5 調査・整理作業に係る資料は、佐渡市教育委員会が保管、管理している。
- 6 本書の図中で示す方位は、すべて真北である。
- 7 引用文献は著者及び発行年を文中に〔 〕で示し、巻末に一括して記載した。
- 8 文中の敬称は省略した。
- 9 伐採、掘削作業等の発掘調査支援業務は有限会社真野テクニカルに委託した。
- 10 空中写真撮影及び遺構図化、遺構トレース及び各種図版作成・編集は株式会社セビアスに委託し、同社の「写真解析図化システム」により画像解析図化および3次元情報の復元を行った。
- 11 本書の執筆は、第Ⅰ・第Ⅲ章が野口、第Ⅱ章1・2B・2C・第Ⅴ章が若林、第Ⅱ章2A・第Ⅳ章は小田が担当し、編集は三者で行った。
- 12 発掘調査から本書の刊行に至るまで下記の方々から多くの御教示、御協力を賜った。記して厚く御礼申し上げる。
井上典子 尾崎高宏 岡村道雄 金子勘三郎 北村 亮 小池伸彦 坂井秀弥 田海義正
羽生令吉 本間裕亨 松原典明 山本 仁 山本修巳 独立行政法人奈良文化財研究所
文化庁記念物課 新潟県教育庁文化行政課 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団

目 次

第Ⅰ章 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯	1
2 調査経過	2
3 整理作業	3
4 体制	3

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1 地理的環境	5
2 歴史的環境	8
A 佐渡島内の鉱山の概要と展開	8
B 周辺の遺跡	12

第Ⅲ章 調査の概要

1 調査区の設定	16
2 調査の方法	16
3 基本層序	17

第Ⅳ章 遺 構

1 概 要	19
A A・B区	19
B C区	21
C D区	21

第Ⅴ章 総 括

1 遺 構	22
2 各種資料から見た本調査区の歴史的位置付け	22
3 推定される水路位置と今後の課題	30
《引用・参考文献》	31
《要 約》	32
《英文要約》	33

関連史料

付 図 西三川砂金山跡復元資料

挿図目次

第1図	第三次・第四次調査区域図	1	第18図	絵図にみえる「鍛冶小屋」	20
第2図	確認調査 A区県道脇斜面	2	第19図	立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図	24
第3図	確認調査 B区県道脇斜面	2	第20図	立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図	24
第4図	確認調査 現県道下部分	3	第21図	立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図	25
第5図	遺構確認 石組水路跡(西から)	3	第22図	立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図	25
第6図	遺跡の位置	5	第23図	立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図	26
第7図	佐渡島内の地質概略図	6	第24図	立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図	26
第8図	真野町地質分布図	7	第25図	水路・堤推定図	29
第9図	佐渡島内鉱山分布図	8	第26図	西三川村砂金山全図	37
第10図	西三川砂金山砂金採掘地位置図	10	第27図	西三川砂金山全図	38
第11図	周辺の遺跡	14	第28図	笹川十八枚村 本田畑・新田畑分布村絵図	39
第12図	調査区域図	16			
第13図	基本層序調査位置図	18	第29図	西三川金山当時稼所墨引	40
第14図	A区トレンチ柱状図	18	第30図	笹川十八枚村砂金山絵図	41
第15図	B区西壁柱状図	18	第31図	笹川十八枚村砂金山地図	42
第16図	C区トレンチ柱状図	18			
第17図	D区トレンチ柱状図	18			

表目次

第1表	佐渡島の地質	6	第3表	周辺の遺跡	15
第2表	佐渡島内鉱山遺跡一覧表	9	第4表	立残山稼所堤・江道一覧表	27

図版目次

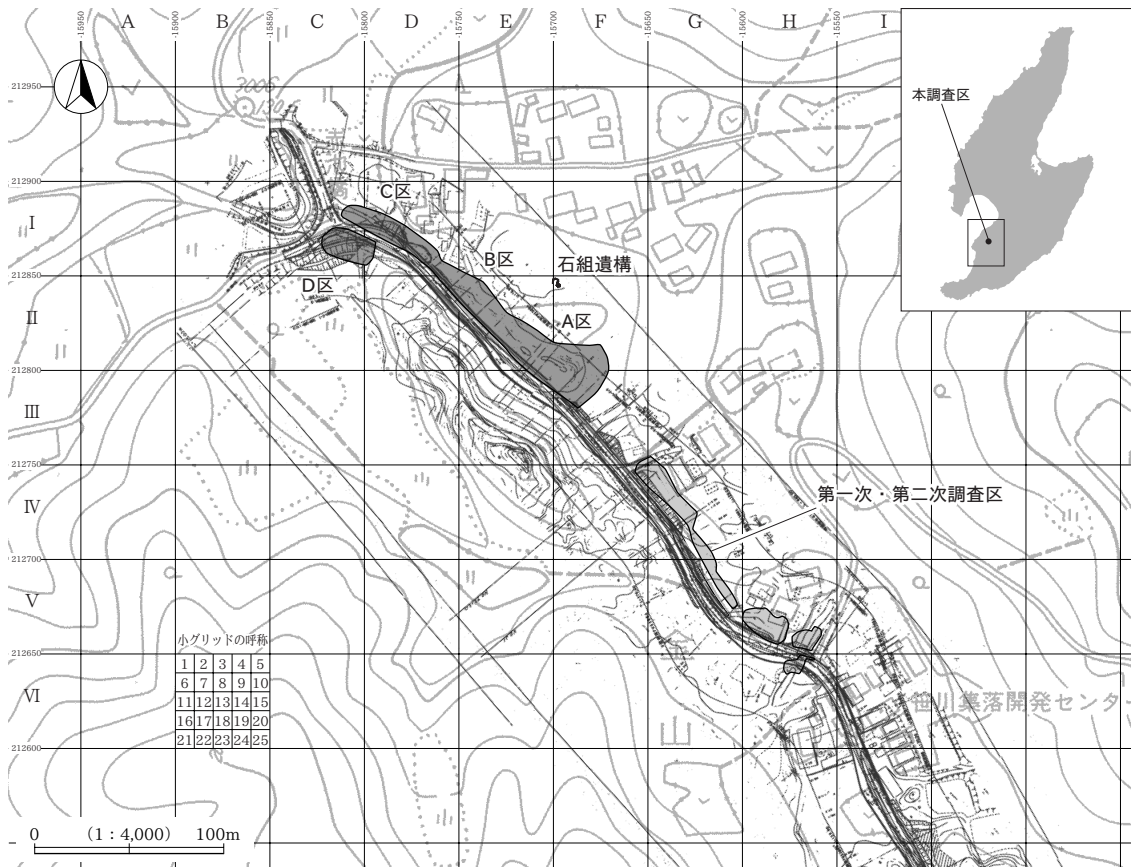
巻頭図版 1	西三川砂金山笹川地区	図版 4	調査区全景、A・B区全景
巻頭図版 2	西三川砂金山全図	図版 5	A・B区全景、水路跡
図版 1	第三次・第四次調査範囲及び土層セクション図	図版 6	石組遺構、現況
図版 2	第四次調査範囲 D区全体図・地形起伏図 石積遺構	図版 7	A・B区
図版 3	石組遺構	図版 8	C・D区
		図版 9	D区

第 I 章 調査の経緯と経過

1 調査に至る経緯

一般県道432号静平西三川線は、主要地方道65号両津真野赤泊線の静平を起点とし、西三川へ至る。真野湾より内陸3kmに位置する笹川地区と国道350号線とを結ぶ主要なルートで、冬期の安全性等に対する集落からの要望もあり、平成5年に改良事業が計画された。周辺には西三川砂金山に関連する遺跡が多く存在し、事業予定地内にカジ屋敷遺跡、せりば遺跡、鉄砲場遺跡、砂金江道遺跡が存在することから、遺跡の取り扱いについて新潟県相川土木事務所（平成14年4月1日より新潟県佐渡地域振興局）と真野町教育委員会（以下、町教委）で協議を行い、確認調査を実施することとなった。確認調査は平成11年度に実施され、現道下及び斜面に砂金採掘時に撤去したガラ石の堆積が検出された。調査結果を受けて本発掘調査を行うことになり、平成13年に第一次調査、翌14年度に第二次調査を実施した〔真野町教育委員会2004〕。

その後、新潟県佐渡地域振興局（以下、振興局）と佐渡市教育委員会（以下、市教委）は平成18年4月24日に協議を行ない、平成14年度に引き続き、市道大小72線分岐点までの間で発掘調査を実施することとなった。



第1図 第三次・第四次調査区域図 (S=1:4,000)

2 調査経過

【確認調査】

平成11年12月1日から平成11年12月15日にかけて、人力による確認調査を実施した。現道下を確認するため、地元の理解を得、一時通行止めを実施した。一帯からは表土下約30cmから砂金採掘時に撤去したガラ石の堆積を確認した他、石組水路跡を検出した。

【第三次調査】

第三次調査は平成19年2月から開始し、立木伐採、運搬、草刈等に約20日を要した。2月21日から、A区・B区(現道脇の沢)に重機を乗り入れてトレンチを2箇所掘削し、覆土の堆積と遺構の状況を確認した。3月5日から重機により覆土除去作業を行った後人力で精査し、水路跡を検出した。遺物は検出していない。3月22日には株式会社セビアスによる空中写真の撮影と画像解析図化を行い、平成18年度調査を終了した。

【第四次調査】

第四次調査は平成20年1月6日より開始し、C区・D区の立木伐採・運搬作業に10日を要した。その後、積雪により調査が一時中断し、3月1日に再開した。重機によりC区のトレンチ調査を行いながら、昨年度調査したA区の清掃を行った。B区については平成18年度に調査未了であったため、3月14日から重機により覆土の除去を行い、水路跡の延長を確認した。同時に、D区については覆土が薄く、地形条件からも重機の使用が困難であったことから、人力で発掘調査を実施した。全面からガラ石の堆積が確認された。遺物は検出していない。3月24日には株式会社セビアスによる空中写真の撮影と画像解析図化を行い、平成19年度調査を終了した。



第2図 確認調査 A区県道脇斜面



第3図 確認調査 B区県道脇斜面



第4図 確認調査 現県道下部分



第5図 遺構確認 石組水路跡(西から)

3 整理作業

報告書作成に係る本格的な整理作業は、平成20年度に実施した。遺物は出土しなかったが、旧地形を復原するための現地踏査や絵図、古文書等関連史料の調査に一定の時間を要した。各種図版の作成、編集は株式会社セビアスに委託した。

4 体制

[確認調査] 平成11年度

調査期間	平成11年12月1日～平成11年12月15日
調査主体	真野町教育委員会 教育長 豊原久夫
事務局	山本 真澄(事務局長) 山本 充彦(事務局長補佐) 計良 伸二(文化行政係主任)
調査担当	堅木 宜弘(文化行政係主事)

[第三次調査] 平成18年度

調査期間	平成19年1月9日～平成19年3月31日
調査主体	佐渡市教育委員会 教育長 石瀬佳弘 ※平成18年5月7日まで " 渡邊剛忠 ※平成18年5月8日から
事務局	石塚 秀夫(文化振興課長) 野尻 邦輔(課長補佐) 世田 和彦(文化行政係長)
調査担当	野口 敏樹(埋蔵文化財係長)

4 体 制

[第四次調査] 平成19年度

調査期間	平成19年12月3日～平成20年3月31日
調査主体	佐渡市教育委員会 教育長 渡邊剛忠
事務局	石塚 秀夫（世界遺産・文化振興課長） 高藤一郎平（課長補佐） 世田 和彦（文化行政係長）
調査担当	野口 敏樹（埋蔵文化財係長） 川村 尚（埋蔵文化財係主事）

[整理作業] 平成20年度

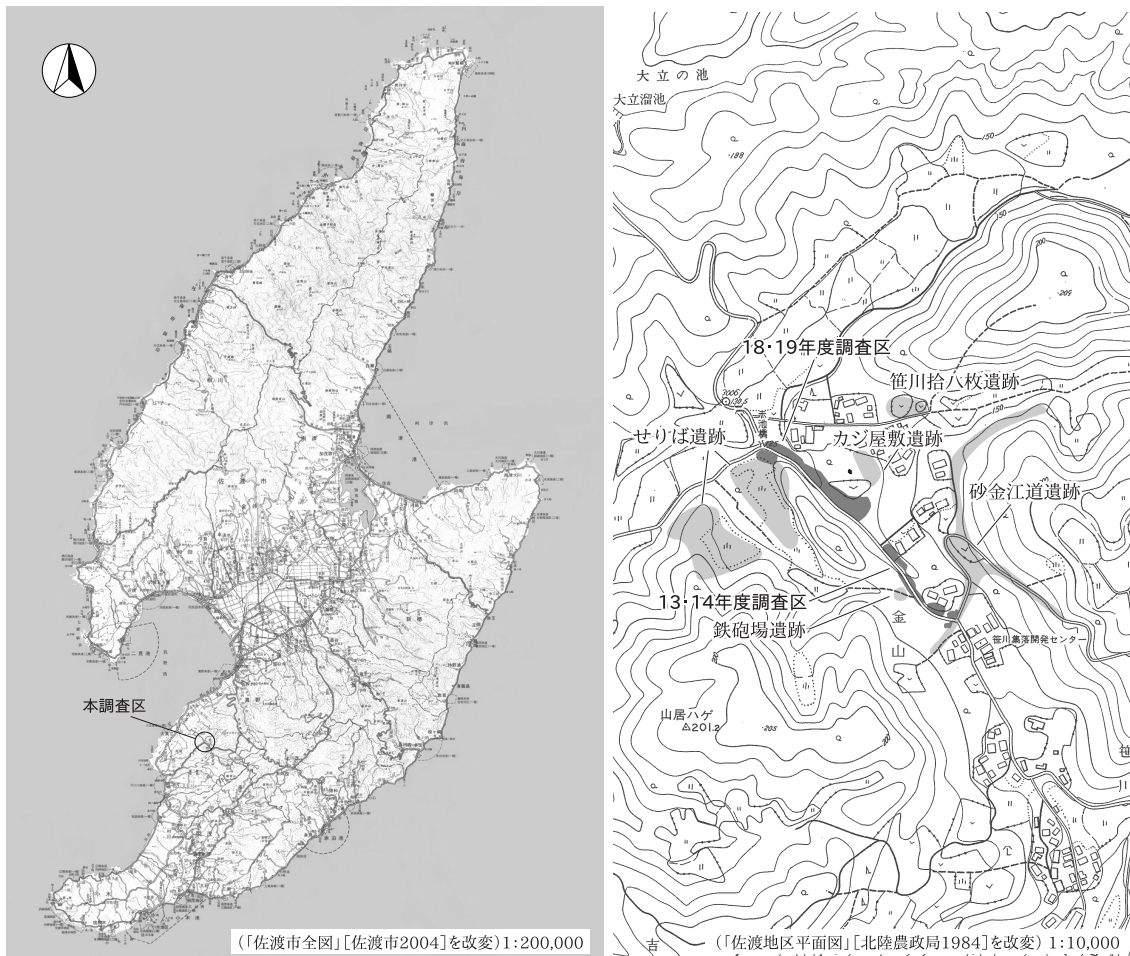
調査期間	平成20年6月12日～平成21年3月20日
調査主体	佐渡市教育委員会 教育長 渡邊剛忠
事務局	高藤一郎平（世界遺産・文化振興課長） 齋藤 義昭（課長補佐） 齋藤 本恭（埋蔵文化財係長） ※平成21年1月31日まで
調査担当	野口 敏樹（学芸係長） 若林 篤男（世界遺産推進係主事）

第Ⅱ章 遺跡をとりまく環境

1 地理的環境

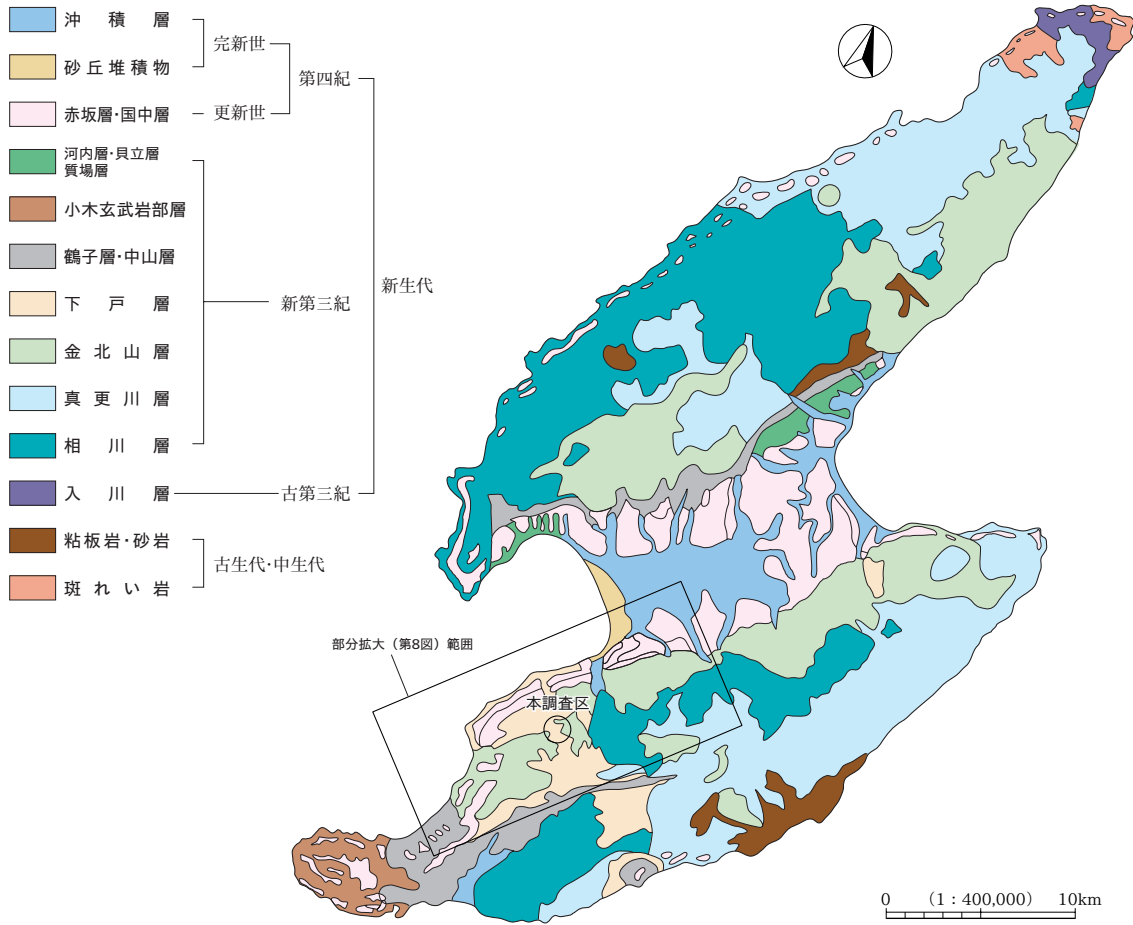
佐渡島は、本州、北海道、九州、四国を除くと、沖縄本島に次ぐ大きさの島で、新潟県海岸(角田岬)より32km西の日本海上に位置し、面積は約855.11km²、周囲の海岸線は281.7kmを測り、山林と雑種地が島面積の80%以上を占めている。地勢は、大まかに山地、海岸段丘及び低地・台地を含む平野からなり、地形要素の複合という点では本州とほぼ同一の性質を持つことが特徴である[式1964]。島中央には国中平野が広がり、北に大佐渡山脈、南に小佐渡山地が並行する形でそれぞれ長軸をNE-SW方向に延ばしている。大佐渡山脈は、標高1,173mの金北山をはじめとする1,000m近い比較的高い山並みが連続し、小佐渡山地は、標高645mの大地山をはじめとする比較的低い山並みが連続する。

佐渡島で確認される最古の岩石は、今からおよそ2～3億年前の古生代後期のものであるが、佐渡島における地層の大部分は、火山によって形成された火山岩類及び日本海の海底で堆積した地層が重なって形成されたものである。このうち、相川金銀山が立地する大佐渡山脈を構成する地質は、古第三紀・斬新世(2300万年前)から新第三紀中新世初期(1800万年前)に堆積したグリーンタフである。また、その他の岩石として、凝灰岩、玄武岩、硬質頁岩がみられる。グリーンタフは、デイサイト(石英安山岩)や安山岩



第6図 遺跡の位置

1 地理的環境



第7図 佐渡島内の地質概略図〔新潟県1989〕を一部改変

地質時代		地層名	層厚m	岩相	おもなできごと		
新 生 代	第 四 紀	完新世	金丸層	110	粘土・シルト・砂および礫の不規則互層	国中平野の誕生	
		更 新 世	国中層	3~20	褐色粘土 シルト・砂および礫の互層	佐渡島の隆起と段丘の形成	
			赤坂層	10~40	褐色粘土、不淘汰礫層		
		新 世	中期	質場層	30	砂とシルトの互層、礫	佐渡島の誕生
	前期		貝立層	60	粗粒砂礫と細粒砂の互層、砂礫		
	第 三 紀	鮮 新 世	河内層	110	細粒砂と石灰質砂の互層 砂質シルトと細~中粒砂の互層 塊状シルト	深くなる古日本海	
		中 新 世	中山層	320	珪藻質泥岩、グロコナイト		
			鶴子層	200	硬質頁岩、グロコナイト質砂岩 玄武岩(枕状溶岩、ハイアロクラスタイト)		
			下戸層	10~30	礫岩、砂岩 石灰岩質砂礫層		
		漸 新 世	金北山層	300	デイサイト溶岩・火砕岩		火山活動をともなう大陸の時代
			真更川層	1500	デイサイト溶岩・火砕岩・溶結凝灰岩 玄武岩・溶岩・火砕岩、シルト岩		
			相川層	1500	変質安山岩溶岩・火砕岩・溶結凝灰岩 礫岩、硬質頁岩、金鉱床		
	中生代	入川層	500	デイサイト質火砕岩・溶結凝灰岩	大昔の海の時代		
6500万		基盤岩類	?	花崗岩			
古生代	2.5億	粘板岩、チャート、砂岩、礫岩 石灰岩、結晶質石灰岩、変玄武岩、変ハンレイ岩、蛇紋岩					

第1表 佐渡島の地質〔神蔵・小林1993〕を一部改変



第8図 真野町地質分布図（『新潟県の地質図2000年版』を一部改変）

の溶岩類やそれらの火砕岩からなる火山噴出物を主体とし、下位から入川層・相川層・真更川層・金北山層の順に堆積しているが、これらをまとめて相川層群とよんでいる[第7図・第1表]。

日本海が誕生した約1,700万年前には、海浸期に伴う砂岩・礫岩・シルトを主体とする堆積岩からなる下戸層・鶴子層・中山層が形成され、これらの地層が隆起運動により変形しながら海上に現れ、佐渡島が誕生したと考えられる。佐渡島が現在とほぼ同じ形状となったのは、今からおよそ数十万年前とされ、第四紀中頃になると隆起運動が活発化して、高い山地が形成され、氷期・間氷期の繰り返しの海水面の上下運動が重なり、海岸段丘が形成されていった。

こうした段丘面は、現在5段まで確認されている。国中平野は中央部が沖積層であるが、周辺部には低位段丘、中位段丘がよく発達し、加茂湖はこの中位段丘によって囲まれている。また、平野西側には真野湾に沿って八幡砂丘が発達しており、こうした砂丘列が7～8列確認されている[新潟古砂丘グループ1987]。

本調査区は新潟県佐渡市西三川カジ屋敷及びび字せりばに所在し、真野湾に注ぐ西三川川の上流約4km、標高約130mの小佐渡山地山中に位置する。この西三川川流域は古くから砂金採取地として知られ、江戸時代になって相川鉱山にとって代わられるまで、本格的な砂金鉱山として稼業した。江戸時代に書かれた『佐渡年代記』および「宝暦以来砂金上納方覚」（『金子勘三郎家文書』）より試算すると、1600年～1650年頃には年平均約8kg、1750～1810年頃には年平均5kg、1810～1866年には年平均1kgの産金量があったという。以下、この地域に分布する砂金鉱床について、『真野町誌（近代編）』[中原2004]の記述をもとに概観する。

金など、金属の鉱床はマグマの熱水作用によって岩礁の中にできる石英脈の中に多く濃縮して含有される。佐渡島内にはいたるところに石英脈が分布し、代表的なものが相川層中の包金石英脈で、相川鉱山をはじめ、佐和田地区の鶴子銀山、真野地区の大須、田切須鉱山などが該当する。一方西三川川流域の砂金鉱床は下戸層の礫岩層の基底部分に濃集している。この下戸層の礫岩層は小佐渡西海岸の羽茂地区亀脇～真野地区大小西部の尾根付近から、東海岸の赤泊地区草木・徳和付近に分布しており、最も発達しているのが西三川川流域である。下戸層の初期の海岸線は西三川川下流付近から赤泊付近であり、北側に後背地、南側に海が広がる地形であったと想定される。当地域はちょうど河川が平地に出る扇状地のような場所で、

河川が運ぶ砂や泥の堆積する環境にあった。これらのことから、上流で相川層中の包金石英脈が削られ、河川によって運ばれてきた堆積物が砂金であり、その上に下戸層の礫岩層が堆積していったと考えられている。

2 歴史的環境

A 佐渡島内の鉱山の概要と展開

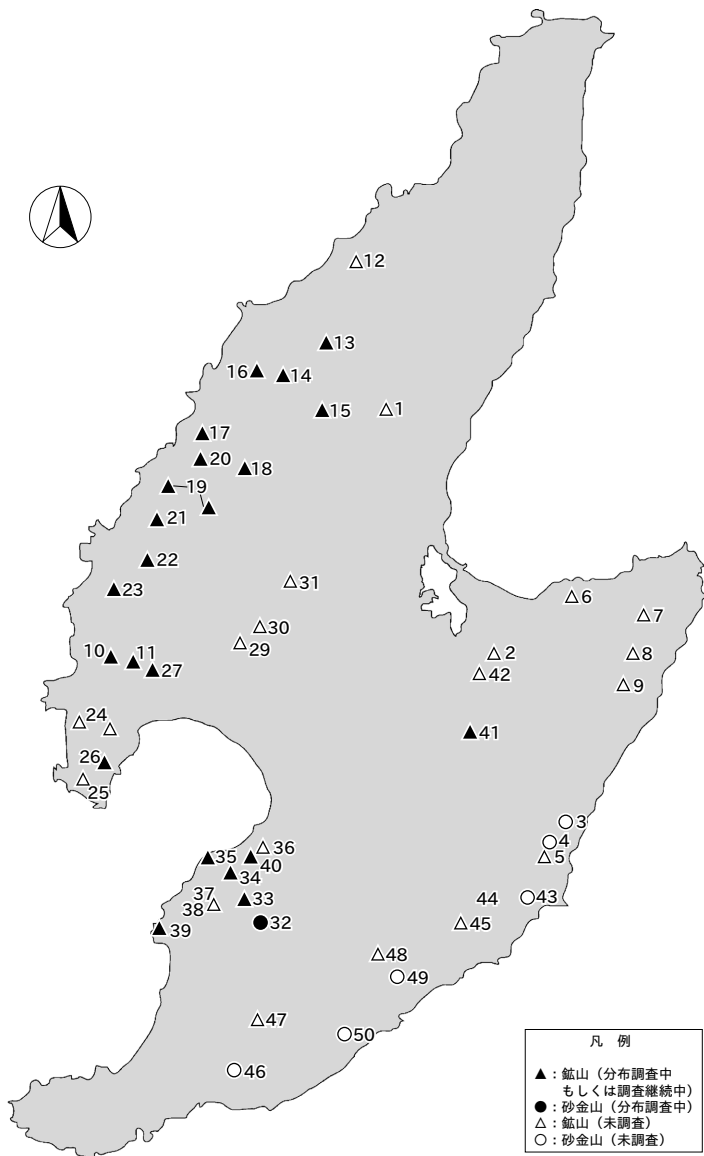
佐渡島には、多様な鉱物に関わる多くの鉱山遺跡が分布している。一般的に佐渡は「金の島」としてイメージされているが、金のみでなく、銀も大量に採掘されていたことは案外知られていない。また、銅の採掘も行われ、まさに鉱山の島といえる。大小合わせて14もの金銀鉱床が存在し〔神蔵・小林1993〕、多くの鉱山遺跡が確認されている。

佐渡島では平安時代以降、こうした鉱物の採掘が継続的に行われ、各時代の採掘遺跡が残っているが、鉱物の採掘形態も時代によって大きく変遷し、長い間の鉱山技術の変遷を目の当たりにできる稀有な島と

いえる。以下に、代表的な金銀鉱山を概観する。

西三川砂金山

西三川砂金山は佐渡市西三川（真野地区）を中心とした地域に所在し、大規模な砂金採取が行われていた。歴史的に最も古い鉱山技術形態は砂金採取で、平安時代末期に成立したとされる『今昔物語集』巻二六、鎌倉時代所期の成立とされる『宇治拾遺物語集』巻第四に佐渡の産金についてほぼ同じ内容の記述がある。『今昔物語集』では、能登（現石川県）の国司の命令で、製鉄集団の長が佐渡で金を採取したという記述があり、国司が藤原実房に比定されることから、11世紀前半頃の様子と考えられる〔橘1964〕。製鉄集団との関連から海岸部の砂鉄採取と結びついていたと考えられ、採取が行われていた場所は、西三川の河口付近であろうと推定されている〔真野町史編纂委員会1976、小菅2000〕。室町時代の永享6年（1434）には佐渡に流罪となった世阿弥が著した『金島書』に佐渡を「こがねの島」とする表記があり、砂金採取が行われていた証拠と考えられる。平安



第9図 佐渡島内鉱山分布図

地区名	鉱山名(別名)	鉱石種別	時代	分布調査	遺跡周知化	出典	絵図資料	備考	
1	両津	白瀬銀山	銀	江戸	無	無	佐渡年代記 佐渡国略記		
2	両津	久知川鉱山	不明	不明	無	無			
3	両津	柿野浦木金山	砂金	中世～江戸?	無	無	佐渡国略記	舟崎文庫 史料では「黄金間歩」の名前が見える。	
4	両津	岩首木金山	砂金	中世～江戸?	無	無			
5	両津	岩首鉱山	不明	不明	無	無			
6	両津	両尾鉱山	不明	不明	無	無			
7	両津	片野尾鉱山	不明	不明	無	無			
8	両津	月布施鉱山	不明	不明	無	無			
9	両津	野浦鉱山	不明	不明	無	無			
10	相川	相川金銀山 (佐渡金山他)	金・銀・銅	江戸～平成元	H11～14	市 302	舟崎文庫・ ゴールデン佐渡 所有絵図 他	県遺跡台帳「佐渡金山遺跡」 一部国指定史跡あり。 H14年度分布調査報告書刊行	
11	相川	茶屋平金山	金・銀	江戸	H17	無	佐渡国略記 他	開発時一鉱山として成立、 後に相川金銀山の一鉱区となる。	
12	相川	小田銀山	銀	江戸	無	無	舟崎文庫		
13	相川	田野浦銀山 (小野見銀山・ 高千鉱山)	金・銀	江戸・近代 ～昭和18	H11～14	市 299	佐渡年代記 佐渡国略記 他	ゴールデン佐渡 所有近代鉱区図 県遺跡台帳「小野見鉱山遺跡」 近代以降「高千鉱山」となる。 H14年度分布調査報告書刊行	
14	相川	入川銀山 (高千鉱山)	銀・鉛	江戸・近代 ～昭和18	H11～14	市 300	佐渡年代記 佐渡国略記 他	舟崎文庫・ ゴールデン佐渡 所有絵図・ 近代図面類 他	近代以降「高千鉱山」となる。 H14年度分布調査報告書刊行
15	相川	孫次郎鉛山 (入川鉛山・ 高千鉱山)	鉛	江戸～昭和18	H11～14	無	佐渡年代記 佐渡国略記 他	舟崎文庫	近代以降「高千鉱山」となる。H14 年度分布調査報告書刊行。報告書 では「入川鉱山孫次郎山」と記載
16	相川	立島(嶋)鉱山 (高千鉱山)	金・銀	江戸・近代 ～昭和18	H11～14	市 301	佐渡年代記 佐渡国略記 他	ゴールデン佐渡 所有近代図面類	近代以降「高千鉱山」となる。 H14年度分布調査報告書刊行
17	相川	鹿野浦鉛山 (高千鉱山)	金・銀・ 銅・鉛	江戸～昭和18	H11～14	無	ゴールデン佐渡 所有近代鉱区図	近代以降「高千鉱山」となる。 H14年度分布調査報告書刊行	
18	相川	片辺鉱山 (与宗鉱山・ 松尾鉱山)	銅・鉛	江戸?	無	無			
19	相川	戸地鉱山 (カツコメ鉱山・ ウノクソ鉱山)	銀?	江戸・近現代?	H11～14	無		H14年度分布調査報告書刊行	
20	相川	戸中鉛山	金・銀・ 銅・鉛	江戸・近現代?	H11～14	無	佐渡年代記 佐渡国略記	H14年度分布調査報告書刊行	
21	相川	北鉄銀山 (川内鉱山・ 吉兵衛鉱山)	銀	江戸・近現代?	H11～14	無	佐渡年代記 佐渡国略記 他	ゴールデン佐渡 所有近代鉱区図 H14年度分布調査報告書刊行	
22	相川	達者銅山 (小蓬山鉱山)	銀・銅	江戸・近現代?	H11～14	無	佐渡年代記 佐渡国略記 他	ゴールデン佐渡 所有近代鉱区図 H14年度分布調査報告書刊行	
23	相川	小川銅山	銅	江戸・近現代?	H11～14	無	佐渡年代記 佐渡国略記 他	ゴールデン佐渡 所有近代鉱区図 H14年度分布調査報告書刊行	
24	相川	大浦鉱山	銀?	江戸	無	市 303			
25	相川	稲籬鉱山	銀?	不明	無	無			
26	相川	二見鉱山	銀?	江戸・近現代	H11～14	市 304	ゴールデン佐渡 所有近代鉱区図	H14年度分布調査報告書刊行	
27	佐和田	鶴子銀山 (西五十里銀山・ 屏風銀山)	銀・銅	室町～昭和21	H14～18	市 374	佐渡年代記 佐渡国略記 他	舟崎文庫・ 岩木文庫・ ゴールデン佐渡 所有絵図 他	H19年度分布調査報告書刊行
28	佐和田	野坂鉱山	銀?	江戸?	無	市 449			
29	佐和田	真光寺鉱山	金・銀?	不明	無	無		坑道崩落により埋没という。	
30	金井	平清水鉱山	不明	不明	無	無		坑道有り。	
31	金井	白硫黄銀山 (白岩尾銀山)	銀	江戸	無	無	舟崎文庫	坑道有り。	
32	真野	西三川砂金山	砂金	平安～明治5	H11、14	市 879 ～883他	佐渡年代記 佐渡国略記 他	舟崎文庫・ 金子家・ 山本家 他	県遺跡台帳「笹川拾八枚」 他関連遺跡のみ周知化 ※分布調査中
33	真野	花見沢銀山	銀	江戸	H14	市 902	川上家文書		
34	真野	大須銀山	銀・鉛	江戸	H14	市 839	佐渡年代記 佐渡国略記 他	県遺跡台帳「大須銀山遺跡」	
35	真野	大須三貫目銀山 (三貫目沢鉱山)	銀	江戸	H14	市 904		県遺跡台帳「三貫目沢鉱山跡」 ※大須銀山の一部か。	
36	真野	滝脇銀山	銀	不明	無	無	山本家文書	山本家 ※背合銀山と同一か	
37	真野	小立大須銀山	不明	不明	H14	無			
38	真野	大立鉱山	不明	不明	無	無			
39	真野	田切須銀山 (西三川鉱山)	銀	江戸・明治 ～大正	無	市 887、 888	佐渡年代記 佐渡国略記 他	県遺跡台帳「田切須大野遺跡」 (集落跡)、「田切須鉱山跡」	
40	真野	背合銀山	銀	江戸	無	市 840		県遺跡台帳上地点不明 ※滝脇銀山と同一か	
41	新穂	新穂銀山 (滝沢銀山・ 瀧沢銀山)	銀	室町～江戸	H12～	市 632	佐渡年代記 佐渡国略記 他	相川郷土博物館・ 舟崎文庫・ 岩木文庫 他	※分布調査中
42	新穂	瀧上銀山	銀	不明	無	無	佐渡国略記 他	相川郷土博物館 史料では「御城間歩」の名前が見える。	
43	畑野	松ヶ崎木金山	砂金	不明	無	無			
44	畑野	松ヶ崎鉱山	金?	不明	無	無		坑道有り。	
45	畑野	丸山鉱山	不明	不明	無	無			
46	羽茂	尾平川砂金山	砂金	不明	無	無		※尾平川流域か	
47	羽茂	清水鉱山	不明	不明	無	無			
48	赤泊	天狗塚鉱山	金?	不明	無	無		坑道有り。	
49	赤泊	荒町川砂金山	砂金	不明	無	無		※天狗塚鉱山下流部の河川	
50	赤泊	柳沢砂金山	砂金	不明	無	無		※柳沢川流域か	

第2表 佐渡島内鉱山遺跡一覧表

2 歴史的環境

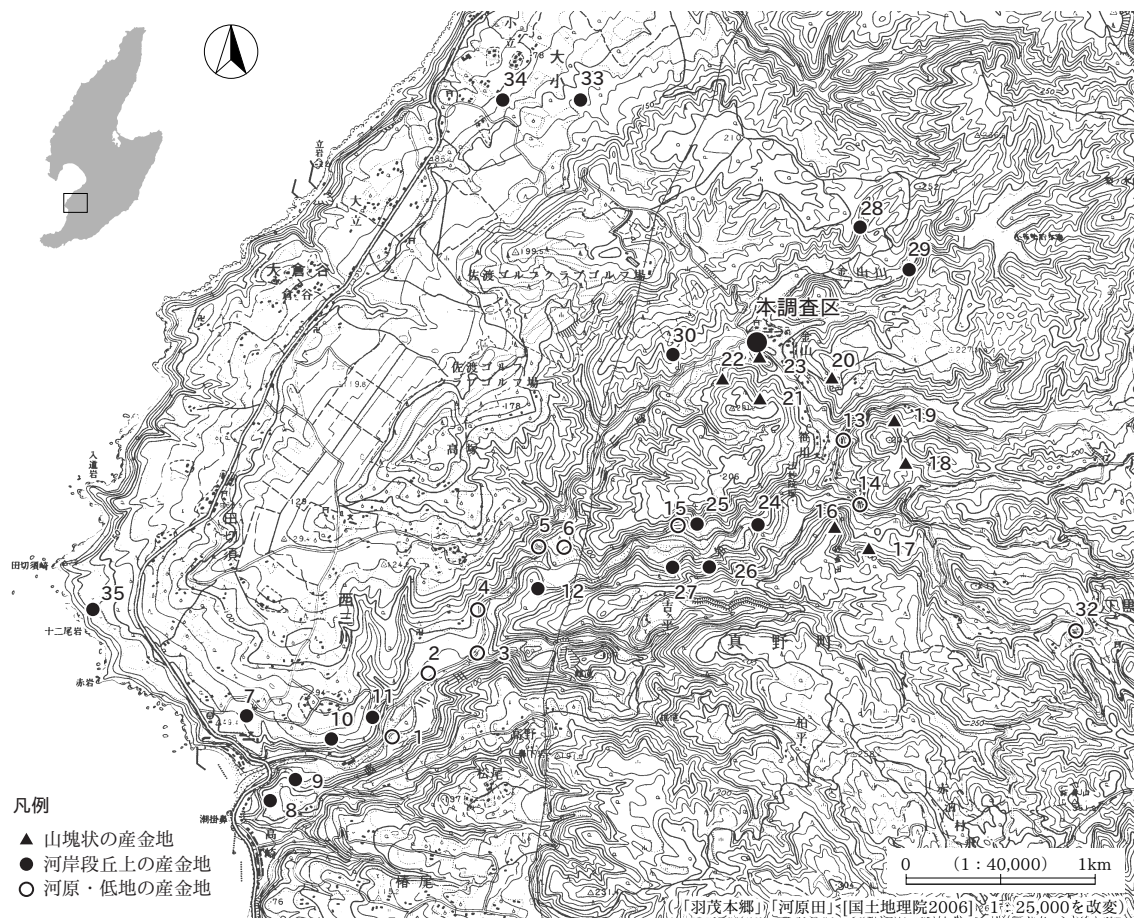
時代から中世後半までの砂金採取の遺構は確認されていないが、砂金採取という技術の性格上、遺構は残りにくいものと考えられる。

中世後半からは砂金採取が盛んに行われるようになったと考えられ、文献等に散見されるようになる。「寛正元年（1460）西三川砂金山始まる。その後79年中絶して、文禄2年（1593）に再び取り立てる」と『佐渡相川志』に記録されている[真野町史編纂委員会1976]。豊臣秀吉が天正17年（1589）、上杉景勝にあてた書状で、西三川の砂金についての記述があり、秀吉の「黄金太閤」としてのイメージ作り[山室1992]には、西三川砂金山の砂金も大きな役割を果たしていたものと考えられる。

江戸時代に入り、増産を図るため、砂金を含む山を掘り崩し、上流から水路を開削し、大量の水を使った砂金採掘が行われた。崩落した山肌、水路や水を溜めた堤の跡が笹川を中心とした一帯に多数分布し、独特な景観を形成している。江戸時代初期の有力山師（鉱山経営者）味方但馬が開削した延長約12kmの水路「金山江」も部分的に残されている。

また、その技術は伝播し、北海道渡島半島に安政年間に西三川の技術者が招聘された事が、西三川の『金子勘三郎家文書』によって明らかになっている[矢野1989]。西三川砂金山は明治5年（1872）まで操業が続けられ、その後も個人的な砂金採掘が行われたことによって、長く技術が伝承された。

次に、西三川砂金山の産金地について言及する。古代の産金地は、西三川川下流域に当たる西三川河原(1)や、河岸段丘下の中田(2)、梅の木(3)、四拾番(4)、笹淵(5)、石原(6)などであるといわれている。この他にも金掘山(7)、上ノ平(8)、角力瀬(9)、ソトワ(10)、諏訪坂(11)、高仙(12)などの産金地があるが、これらは寛永期(1624～43)頃より後にも採掘が行われている。



第10図 西三川砂金山砂金採掘地位置図（[堅木ほか2004]を一部改変）

中世の記録は少ないが、寛正期(1460～65)頃には砂金採取の中心は西三川川上流域に当たる笹川地区に移っていたという。ここでは、十五番川(13)、茶屋川(14)、イラガ平(15)などの笹川の河原が採取地であったように思われる。しかし、中世末の文禄2年(1593)頃には、砂金採取技術が大きく変わり、それまでの河原などの沖積地を小規模に掘削する方法から、金山の山裾や谷を大規模に掘削して、用水路の水で洗い流すという方法に変化していった。これにより、河原や低地以外でも砂金採掘が可能となり、多くの産金地が掘られるようになった。笹川集落の周囲には、虎丸山(16)、鶴峠山(17)、杉平(18)、影平(19)、峠坂山(20)、中柄山(21)、金山集落寄りには中平山(22)、立残山(23)といった山塊状の産金地があり、笹川川沿いの河岸段丘上にはザル(24)、根笹(25)、上牛場(26)、下牛場(27)、金山川沿いの段丘上には五社屋(28)、成由山(29)、大ガケ(30)、などの産金地があった。この他にも西三川川流域には鴨ヶ沢(31)、割留沢(32)があり、海岸段丘上には沢山(33)、水上山(34)、田崎(35)がある。

この他、新穂から柿野浦に抜ける古道清水寺越えにも柿野浦木金山が存在し、新穂銀山開発以前に砂金採取が行われていたことが想定されていたが、近年株式会社ゴールデン佐渡所蔵資料の中から柿野浦木金山の絵図が発見され、西三川砂金山と同様に山を崩し、水を流して砂金採掘を行っている状況を確認することができた。

鶴子銀山

佐渡市沢根、沢根五十里(佐和田地区)、相川羽田村(相川地区)に所在する佐渡で最初に本格的に稼がれた銀山である。相川金銀山が発見されるまでは佐渡最大の銀山であった。

16世紀の大航海時代に、南米のポトシ銀山をはじめ大規模な銀山開発が行われ、世界の産銀状況は大きく変化した。同時に中国との交易のために日本の銀鉱山も大開発され、当時世界の産銀の約3分の1が日本産であったと推定されている[島根県教育委員会1999]。石見銀山や生野銀山が開発され、佐渡にもその余波が及び、多くの山師、技術者が各地の鉱山から佐渡に入っている。天文11年(1542)大佐渡山脈の低丘陵地に鶴子銀山が開発された。大規模な露頭掘りや樋追い掘りによって銀・銅の採掘が行われ、遺構が広範囲に分布している。天正17年(1589)の上杉景勝の佐渡攻略は鶴子などの鉱山の目的があったとされている。攻略後、鶴子銀山には陣屋が置かれ代官が任命された。

文禄4年(1595)には石見銀山の技術者によって当時の最先端技術であった坑道掘りが導入され、産銀量が飛躍的に増大し、「鶴子千軒」とよばれる繁栄期を迎えた。また、銀山に物資を搬入するために沢根の港が栄え、有力な廻船問屋が軒を連ねたとされている。しかし、相川金銀山の開発が本格化すると、寺院や大工町などが相川へ移転していき、鶴子銀山の鉱山集落は衰退していった。

鶴子銀山は相川金銀山と同様に、明治以降近代的な設備や技術の導入により再開発が行われ、昭和21年(1946)まで操業が続けられた。

新穂銀山

佐渡市新穂(新穂地区)に所在する、鶴子銀山に続いて天文12年(1543)以後、開発が行われた佐渡第2の銀山である。本格的な開発は慶長9年(1604)、徳川家康によって佐渡代官として大久保長安が任命されて以後行われた。江戸幕府によって経営され、慶長・元和・慶安にかけて繁栄し、慶安2年(1649)の大盛りを最後に衰退した。露頭掘り跡と樋追い掘り坑道が混在し、百枚間歩と呼ばれる初期の大規模な坑道跡も確認されている。新穂銀山は滝沢銀山とも呼ばれ、その繁栄は「滝沢千軒」と称された。銀山のにぎわいによって市が設けられて新穂市町が成立し、現在も新穂市街地として町並を残している。17世紀前半の最盛期には相川金銀山の有力山師であった味方但馬も新穂銀山で稼ぎ、法華信者であった味方は根

本寺を菩提寺とし、現在の大伽藍を寄進したとされる。新穂銀山に物資を供給した港は夷湊（現在の両津）と考えられ、『佐渡風土記』元和8年（1622）の諸番所役の納まり額によれば、相川、沢根に次ぐ額が記入され、大規模な港であったことが伺える。夷湊からは内水面交通によって潟上まで運ばれたと考えられている[新穂村編さん委員会1976]。新穂銀山は近世前半で衰退し、後には砥石を産出するようになった。

相川金銀山

佐渡市銀山町・下相川他（相川地区）に所在する江戸幕府の財政を支えた日本最大の金銀山である。鶴子銀山の開発を端緒として、鶴子銀山から山の稜線を越え、金銀鉱床の開発が進み相川金銀山が発見された。最初に開発されたのは六十枚間歩で、近接する傾斜地に上相川と呼ばれる初期の鉱山町が形成され、「上相川千軒」と呼ばれ、非常に栄えた。石組みと平坦面によって計画的に造成された宅地・道路・水路の跡などが遺構として現在も確認でき、吉野造りと呼ばれる斜面を利用した家並みが建ち並んでいたと考えられている。最も高所に鉱山の神である「大山祇神社」が祀られ、移住した人々とともに勧請された寺院跡も残る。当時の絵図も多数残っており、道路跡や寺社など現況と対比が可能である。

その後、有力な鉱脈が多数発見され、佐渡に空前のゴールド・シルバーラッシュをもたらした。国内最大級の露頭掘り跡である道遊の割戸や、国指定の宗太夫坑をはじめ、長大な坑道が多数残されている。慶長6年（1601）には、徳川家康によって佐渡金銀山は直轄地となり、佐渡は天領となった。

慶長8年、相川に本格的な町立て（都市計画）を試みた大久保長安によって、上相川から現在の相川に中心地が移り、陣屋（現在の佐渡奉行所）を中心として商人町の京町、鉱夫が居住した大工町、各種職人町などを計画的に形成した。その後、17世紀前半の最盛期には人口5万人と推定される我が国屈指の鉱山都市が誕生することとなった。

日本の金銀山は16世紀の後半から本格的な開発が行われ、17世紀前半に繁栄し、以降急速に衰退する。相川金銀山も同様な衰退をたどるが、大規模な南沢疎水道の開発などの国家的なプロジェクトによって、勢衰を繰り返しながらも、幕末まで江戸幕府の財政基盤であり続けた。幕末に江戸幕府は外国人技師を佐渡に派遣し、鉱山の再開発を図ったが、明治維新を迎え、明治新政府に引き継がれていった。明治時代においても相川金銀山は官営鉱山として、欧米の先進技術が導入され、日本初の豎坑である大立豎坑が開発されるなど、日本の近代化を牽引した。明治29年（1896）に三菱合資会社に払い下げられ、平成元年（1989）まで操業が続けられた。大立豎坑をはじめ、明治以降の粗砕場、貯鉱舎、選鉱場、積出港などの一連の近代化遺産が現存する。

現在では、操業されている鉱山はなく、ゴールデン佐渡による「宗太夫坑」などの観光坑道が昔日の面影を伝えているのみであるが、近年、概要を説明した4つの鉱山の国指定史跡化を目指し、調査が進められている。

B 周辺の遺跡

西三川砂金山周辺には、旧石器時代に遡る遺跡は確認されていないが、真野地区田切須を中心とした海岸段丘上に縄文時代草創期の遺跡が存在し、にいやの田遺跡からは局部磨製石斧、小布勢遺跡からは尖頭器[小熊・立木1998]が出土している。前期後半以降になると、遺跡の分布は国中平野の舌状台地に移り、埋葬人骨が検出された三宮貝塚[中川ほか1989]や県史跡の藤塚貝塚[岡本ほか1969・本間ほか1989]といった貝塚が所在し、現在よりも内陸部まで海水面が浸入していたことがわかる。

弥生時代から古墳時代に入ると、低湿地を利用して水田開発が行なわれる影響から、平野部の沖積地に

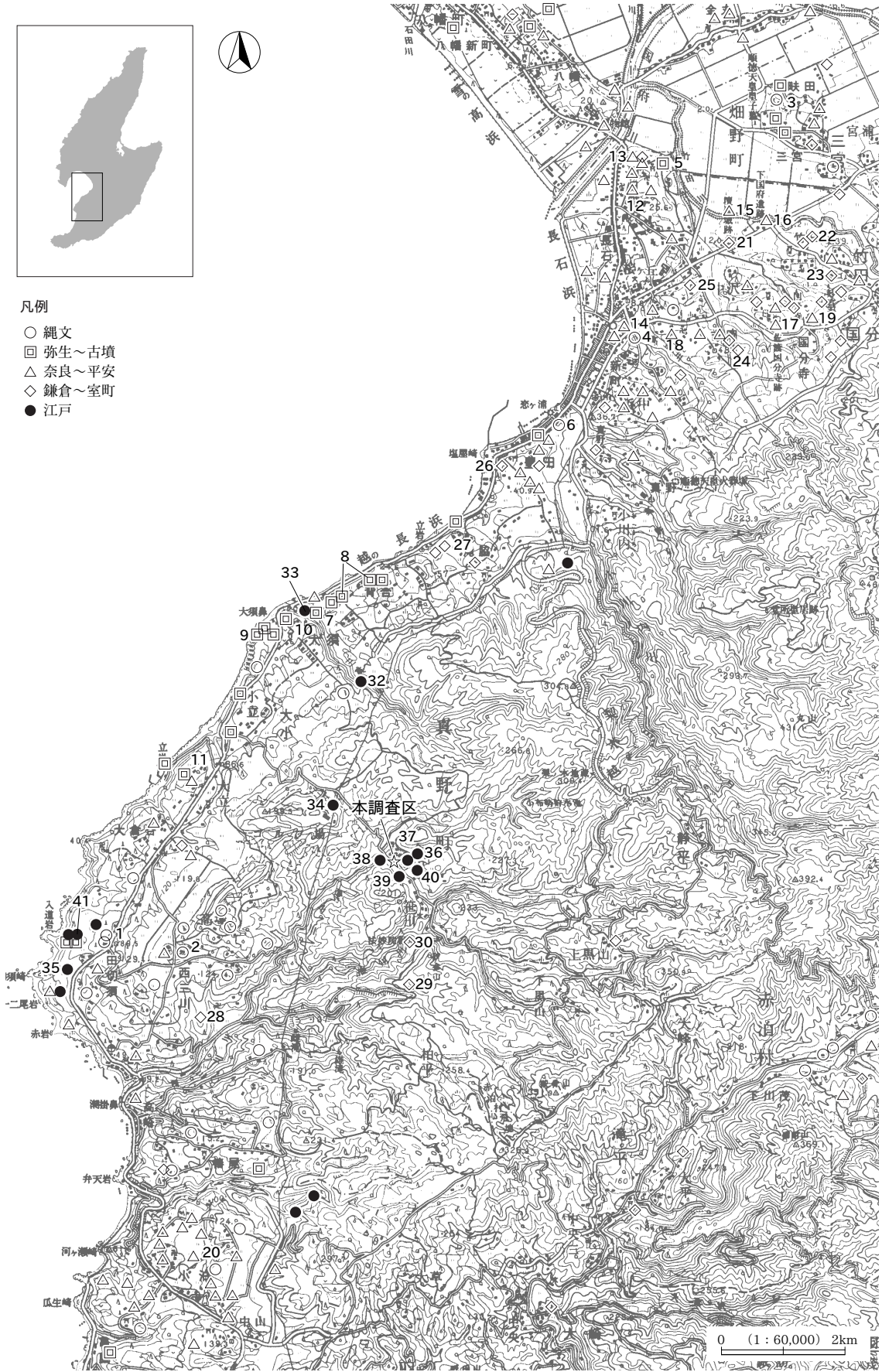
遺跡の分布がみられるようになる。特に弥生時代中期中葉からは玉作遺跡が卓越してみられ、若宮遺跡 [今井^{ほか}1968・本間^{ほか}1969]からは玉類のほか、弥生土器や古式土師器などが出土している。このほか銅鏃や管玉未製品が出土した豊田浜田遺跡 [関・本間^{ほか}1969]といった集落遺跡もみられる。古墳時代後期後半になると、横穴式石室を伴う円墳が現れるが、これらは平野部ではなく、真野湾に面した段丘上に立地し、1基から数基が散在していることが特徴である。真野地区には21基の古墳が確認されており、このうち10基が真野古墳群として県史跡に指定されている。

奈良・平安時代には、真野湾に面する平野部や台地上に国府関連の遺跡が数多くみられるようになる。平野部では、土塁状遺構の残る佐渡国衙跡 [足利1971]、「軍」「団」といった墨書土器が出土し雑太郡衙や雑太団の所在地と想定される四日町高野遺跡 [椎名1959]、金銅製帯金具や風字硯が出土した庚門塚遺跡 [金沢・山本1960]、条里制遺構が検出された竹田沖条里遺跡 [本間^{ほか}1977・1978]などが存在する。台地先端部には、佐渡国衙関連と考えられる掘立柱建物跡や墨書土器が検出された国史跡の下国府遺跡や、須恵器・布目瓦・陶磁器などが出土し古代の佐渡国衙跡や鎌倉期の佐渡守護所跡に比定されている壇風城跡が所在する。台地上には中央伽藍や塔跡が残る国史跡の佐渡国分寺跡 [若林2004・2005、川村^{ほか}2008]、「□館」「□寮院」「□郡」などの墨書土器が出土し雑太郡衙跡や雑太駅跡に推定される仲畑遺跡 [山本^{ほか}1996]の他に、佐渡国分寺瓦を生産した経ヶ峯窯跡 [山本^{ほか}1996]や、9世紀中頃から10世紀前半まで越後全域へ須恵器を供給した県史跡の小泊須恵器窯跡群 [戸根^{ほか}1994、木村^{ほか}1995・1996、川村^{ほか}2005]といった生産遺跡もみられる。

中世に入ると、承久3年(1221)の承久の変の影響により、佐渡国守護代として相模国(現神奈川県)出身の本間氏や藍原、土屋、渋谷氏等が入国する。彼らや彼らと結んだ地域有力者は、後に地頭や村殿とよばれる支配者階級となり、真野地区では台地の先端部分に山城を築いて居城としている。竹田台地には雑太本間氏の居城があり、先端部には周囲に土塁を築き三方を空堀で囲んだ竹田城跡、その後背地には本郭の四方を堀が走り3つの脇郭を持つ雑太城跡(現妙宣寺) [山本1960・山本^{ほか}1994]が所在する。吉岡台地には、複数の郭を持ち珠洲焼・中世陶器等が出土した吉岡元城跡 [山本1961・山本^{ほか}1994]や吉岡城跡 [山本1960・山本^{ほか}1988]があり、雑太本間氏から分かれた吉岡本間氏の居城であった。このほか、豊田台地や滝脇台地といった真野湾に面する海岸段丘先端部分にも、複数の郭や空堀を持つ渋手城跡 [山本1985]や滝脇城跡 [堅木1999]などが築かれた。この地域は吉岡本間氏の支配領域の西端にあたり、家臣である足立氏が統治しており、羽茂本間氏に対抗するために築城されたと考えられる。

一方、西三川砂金山の周辺部は戦国時代末期には本間三河守という赤泊の地頭の領内であったという。西三川川河口より1.2kmほど上流の右岸段丘先端部には3郭の西三川城が、笹川集落南部の山頂平坦面には笹川城跡が存在し、西三川砂金山を支配するための支城であったと考えられる。笹川城跡に隣接する法名院塚は順徳上皇第三皇子彦成親王の墓とされ、現在陵墓参考地となっている。西三川砂金山との関係は明らかではないが、彦成親王は阿弥陀仏を信仰しており、古くから鉱山と関係のある浄土真宗門徒と共にこの地を訪れたとの説がある。

江戸時代に入ると、西三川砂金山に多くの山師が進出し、彼らによって周辺の鉱山開発が行われた。江戸時代中期に書かれた『佐渡四民風俗』には、「背合村より田切須村辺までに以前稼ぎ捨ての銀山・銅山・鉛山等古間歩数か所あり」と記されており、真野地区滝脇から田切須にかけての海岸段丘上や段丘間の沢沿いには、背合銀山、大須銀山、大須三貫目沢銀山、花見沢銀山、田切須銀山といった鉱山遺跡が分布する。本調査区が所在する笹川集落は、中世末から近世にかけて西三川砂金山の中心地として栄え、集落内



第11図 周辺の遺跡〔「河原田」「赤泊」〔国土地理院2007〕1：50,000を改変〕

No.	遺跡名	時代	種別	備考	No.	遺跡名	時代	種別	備考
1	にいやの田	縄	遺物包含地		21	壇風城跡	室	遺物包含地	
2	小布勢	縄	遺物包含地		22	竹田城跡	室	城館跡	
3	三宮貝塚	縄	貝塚		23	雑田城跡	室	城館跡	
4	藤塚貝塚	縄	貝塚	県指定史跡	24	吉岡城跡	室	城館跡	
5	若宮	弥古奈平	遺物包含地		25	吉岡元城跡	室	城館跡	
6	豊田浜田	縄・奈・平	遺物包含地		26	渋手城跡	室	城館跡	
7	三貫目沢東・西古墳	古	古墳	県指定史跡	27	滝脇城跡	室	城館跡	
8	蝦夷塚第1号・第2号古墳	古	古墳	県指定史跡	28	西三川城跡	室	城館跡	
9	ケラマキ第1号～第6号古墳	古	古墳	県指定史跡	29	笹川城跡	室	城館跡	
10	大須第1号～第3号古墳	古	古墳	県指定史跡	30	法名院塚	中世?	塚	陵墓参考地
11	大立蝦夷沢古墳	古	古墳	県指定史跡	31	背合銀山	近世	鉱山跡	地点不明
12	佐渡国衙跡	奈	古墳		32	大須銀山	近世	鉱山跡	
13	四日町高野	平	遺物包含地		33	三貫目沢鉱山跡	近世	鉱山跡	
14	庚門塚	平	遺物包含地		34	花見沢銀山跡	近世	鉱山跡	
15	竹田沖条里	奈	条里跡		35	田切須鉱山跡	近世	鉱山跡	
16	下国府	奈・平	遺物包含地	国指定史跡	36	笹川拾八枚	近世	鉱山跡	
17	佐渡国分寺跡	奈	寺院跡	国指定史跡	37	カジ屋敷	近世	鉱山跡	
18	仲畑	平	遺物包含地		38	せりば	近世	鉱山跡	
19	経ヶ峰窯跡	奈	窯跡		39	鉄砲場	近世	鉱山跡	平成13・14年調査
20	小泊窯跡群	奈	窯跡	県指定史跡	40	砂金江道跡	近世	鉱山跡	平成13・14年調査

第3表 周辺の遺跡

には西三川金山役所に比定される笹川十八枚遺跡、砂金採掘用具の製造や鍛造を行ったカジ屋敷遺跡、金の精錬場跡とされるせりば遺跡、金児の住居跡と想定される鉄砲場遺跡、砂金流しに使用した水路の石組遺構が残る砂金江道跡といった鉱山関連の遺跡が存在する。周辺には中世以前に遡る包蔵地や垣の内村落が存在せず、江戸時代の記録にも「西三川砂金山は寛正3年(1462)に始まり、その後中絶を経て文禄2年(1593)再開発された」とあることから、笹川は砂金山開発に伴って中世以降に形成された集落であると考えられる。

第三章 調査の概要

1 調査区の設定

本調査は平成18～19年度にかけて行われたが、便宜上調査区を4箇所(A区～D区)に区分し、国家座標の軸に合わせてグリッドを設定した。大グリッドは50m方眼とし、東西方向はアルファベットのA、B、C…、南北方向はローマ数字のI、II、IIIとした。また、大グリッドを25分割し、10m方眼の小グリッドを設定した。

現道脇の沢部については、平成18年度に調査した東南側をA区とし、平成19年度に調査した北西側をB区とした。市道大小72号線の分岐点付近の北側についてはC区、その南側でせりば遺跡に隣接する高台部分をD区とした。



第12図 調査区域図 (S=1:2,000)

2 調査の方法

調査区内は、杉林や竹林、その他の雑草に覆われていたため、各年度ごとに区域内の伐採・草刈作業を行った。その後A～C区については重機でトレンチを掘削し、覆土の堆積や遺構断面を確認した。

その後、A区については重機で表土除去作業を行い、人力で遺構を精査し、ガラ石の堆積と水路跡の検

出作業を行った。B区については、平成18年度に縦断トレンチを掘削し、19年度にはガラ石の堆積面や地山面(県道側)の覆土を重機で除去した。C区についてはトレンチを2本掘削し、覆土とガラ石の堆積状況を確認した。D区については、地形上重機が導入できず、覆土も30cm程度と浅いため、人力でトレンチ調査を行い、その後全面的に覆土を除去しながらガラ石の堆積状況を検出した。B区の北側には平成15年度に行われた分布調査により石組遺構が確認されており、遺構内外の草刈を行った。

遺跡や遺構、トレンチのセクションについては、株式会社セビアスによる空中写真や解析図化の撮影を行った。

3 基本層序

【A 区】

I層として30～50cm程度の腐葉土層があり、II層として褐色土層が確認された。いずれも拳大～人頭大の角礫を含み、谷の底部や北側斜面については、草刈完了状態で角礫の散布や堆積が確認できた。

【B 区】

西側(県道側)壁については、シルト質やローム質の褐色土がガラ石層(A区におけるII層に対応)上に堆積していることが確認された。現県道工事における掘削や客土の影響を受けている。

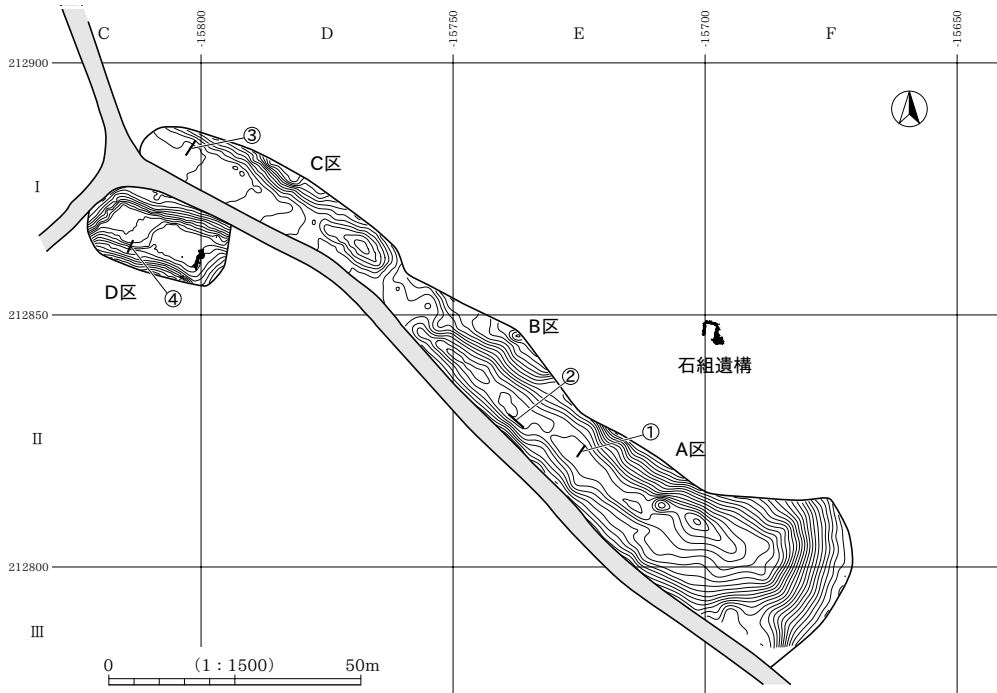
【C 区】

現県道の造成に伴う掘削や客土の影響を受けており、III・IV層に拳大～人頭大の角礫を多く含んでいる。D区はI層として10～20cm程度の腐葉土層があり、II層として赤褐色土層が確認され、拳大～人頭大の角礫を多く含んでいる。

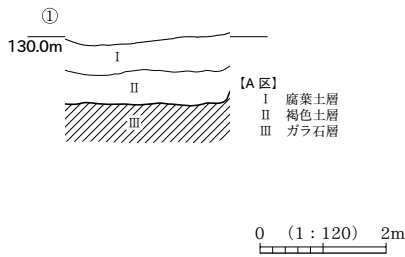
【D 区】

I層は10cm程度の腐葉土層、2層は赤褐色土層で、拳大～人頭大の角礫を多く含んでいる。

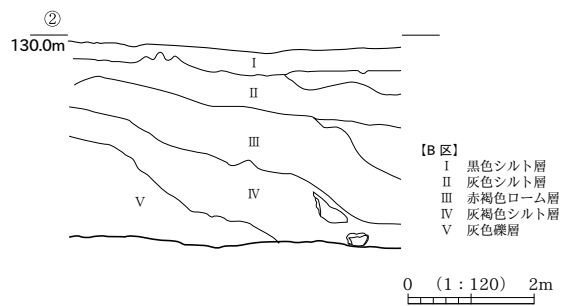
3 基本層序



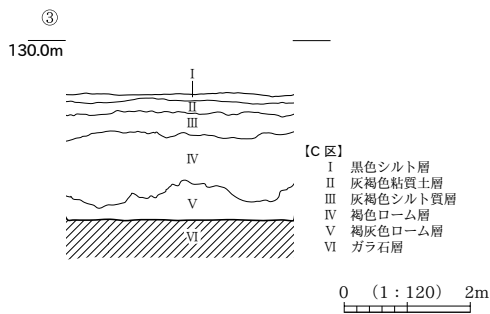
第13図 基本層序調査位置図



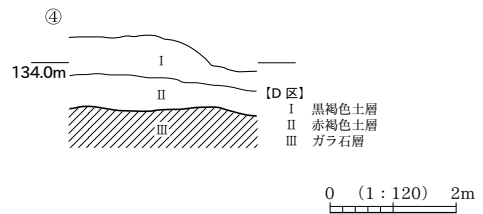
第14図 A区トレンチ柱状図



第15図 B区西壁柱状図



第16図 C区トレンチ柱状図



第17図 D区トレンチ柱状図

第Ⅳ章 遺 構

1 概 要

西三川川周辺では、古代から砂金採取が行なわれていたことが伝承されている。古代・中世段階での砂金採取方法は明らかになっていないが、おそらく海岸や河川で、海浜、川底等に堆積した砂金を含む層を採取し、ゆりわけが行なわれていたと考えられる。戦国期に各地で戦費調達のための鉱山開発が盛んに行なわれ、金銀の産出量が飛躍的に増加した。慶長年間頃、西三川川流域の笹川集落付近でも大規模な砂金採掘方法が導入され、産出量を増やしたと考えられる。導入された大規模な砂金採掘方法は、最長12kmを測る長短の水路によって集められた水を堤に貯め、砂金山の斜面を掘り崩した稼ぎ場に、水を一気に流し、比重選鉱によって砂金を採取する方法である。水路の掘削など、大規模な土木工事が必要となるため、財力をもつ有力山師（鉱山経営者）の関与が推定されている。史料から、味方但馬、早川筑後などの江戸時代初期に活躍した山師達の名を冠する水路も残されている。明治5年の操業停止まで、水路は新規掘削や補修なども行なわれた。現況は水田への灌漑用水路として使用されているものや痕跡を残すのみのものもある。水路や堤、砂金が採掘された砂金山の残丘などが現在も遺構として残っている。こうした大規模な土木作業を伴う比重選鉱方法は、山陰地方で江戸時代に盛んに行なわれた砂鉄採取のための「かなな流し」と類似し、その関係も注目される。

今回の発掘調査や継続して行なわれてきた分布調査、史料調査によって、最も初期から稼がれていたとされる立残山と砂金江道、立残堤の関係が明らかになった。また、絵図にも表現されていた水路や稼ぎ場の周辺に描き込まれていたガラ石の堆積状況も確認することができた。現在の笹川集落は耕作地も含め、表土下の状況をうかがい知ることができないが、一枚土をめくれば、あらゆる場所がガラ石の堆積場となっていることが明らかになった。こうしたガラ石は、家屋のための平坦部や水田を造る際の石積等に多用されている。

A A・B 区

1) 水 路 跡 [図版1・4・5・7]

現況では、立残山の残丘部分に沿って緩やかな沢状を呈していた。ⅡD・E・Fグリッドに位置する上場最大幅約5.0m、下場最大幅約3.0m、深さ約0.75mである。確認された距離は約85mである。現県道工事に伴って、若干の丘稜部の掘り崩しがあったと考えられるが、現況は砂金採取の最終段階での地形を残した沢状地形と考えられる。表土を除去した後は、逆台形状の明確な落ち込みをもつ溝状地形を検出した。人工的な溝かどうか、判断が難しい部分があるが、底部には川原石が水平に並ぶ状況が確認でき、流路であったと考えられる。位置等から判断すると、この溝状地形は、記録類にみられる真野地区豊田地内の「高葛沢関口」を水源とし、「青池堤」、「切貫」（トンネル）を通過して「立残堤」に貯められ、石組水路を経て立残山稼ぎ場に至る水路の最終部分の可能性が高く、人為的な水路の可能性が高い。おそらく、平成13・14年の第一次・第二次調査で確認された立残堤からつながる「北水路」と仮称した石組水路[堅木ほか2004]の延長に当たるものと想定される。Ⅱ・ⅢFグリッド周辺は県道から宅地への自動車乗り入れのため、大規模な盛土が行なわれたため、水路は分断されている。稼ぎ場の状況が明確ではないが、調査範囲がおおよそ立残山の稼ぎ場であったことは確実と考えられる。稼ぎ場の位置によって、水路は随時変更されていたと考えられる。

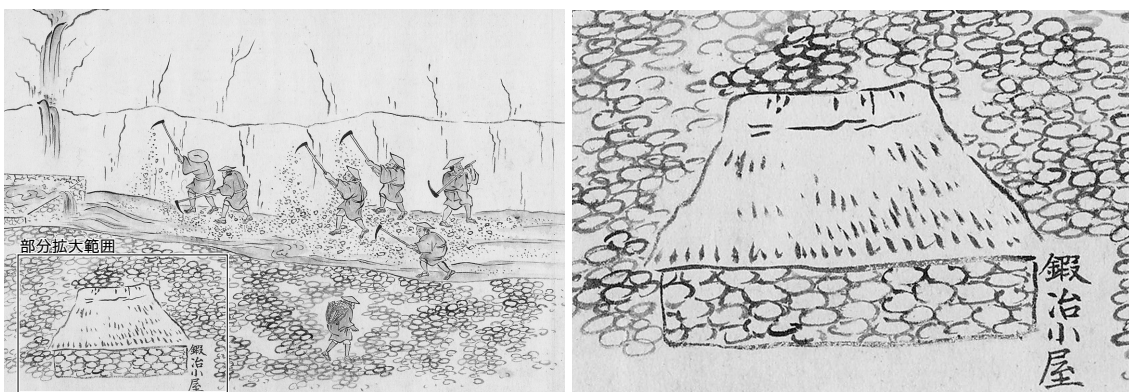
2) 石組遺構〔図版1・3・6、第18図〕

今回測量を実施した石組遺構は、ⅡF1グリッド、立残山の稼ぎ場を挟んだ北側の平坦部に位置している。短辺約2.0m、長辺約2.3mの方形に近い平面プランを呈し、三方にガラ石を積み上げた壁立ちの石組遺構である。奥壁部で最大1.1mの高さをもつ。南側、立残山と水路を向いた方向に開口する。床面等の発掘調査は行わなかった。

笹川集落周辺には、このような壁立ちの石組遺構が多数存在する。分布状況は平成14年～16年の調査によって確認され、以下のように特徴を捉えられている。「ほぼ方形・長方形などの平面をもつもの、あるいはやや楕円形を呈するものなどがあり、小型のものでは一辺2mから3mくらい、大きなもので一辺7mから8m、特に大型なものでは一辺10mくらいのもので一ヶ所に数基ずつ固まって存在するという状態である。各石組はそれぞれ頭大くらいの自然石を高さ1m内外に周囲に積み上げ、とくに前面には入口状に積石をしないものが大部分である」〔山本2004〕。分布状況は各砂金山の麓の平坦部、砂金採取を行なった稼ぎ場付近に集中している〔第25図〕。

以前から、絵巻に表現されている道具類の修理を行なう鍛冶小屋や作業場兼住居等の可能性が指摘されていた。平成13・14年の第一次・第二次調査でも、石積壁をもつ第1号住居跡の床面から石組炉が検出されており、鉄滓の分析結果から鍛冶炉と確認された〔堅木ほか2004〕。石組遺構は砂金採掘時の鍛冶小屋であると考えられ、床面からは柱穴等は検出されないため、絵巻で表現されているように覆屋は茅葺の簡便なものであったと考えられる。今回測量調査した石組遺構は、発掘調査を行っていないため、明確に鍛冶小屋と断定するわけにはいかないが、規模等、第1号住居跡に類似しているため、鍛冶小屋である可能性が高い。また、集落からの聞き取りによれば、砂金採掘に従事した人々の休憩所、住居として用いられていたという伝承も残るほか、第一次・第二次調査報告では、水路管理や見張り小屋としても想定されている。今後、石組遺構を類別し、抽出した遺構の発掘調査によって、性格を明らかにしていく必要があると考えられる。

また、こうした石組遺構は相川金银山、鶴子银山、新穂银山でもそれぞれ数基確認されているほか、西三川砂金山に隣接する旧真野・羽茂地内の椿尾石・小泊石（石塔、粉引き臼、地藏等の石材とされた）の採掘場付近にも確認されるため、関連を調査していく必要がある。



第18図 絵巻にみえる「鍛冶小屋」〔西三川砂金山絵巻〔山本家所蔵〕〕

B C 区〔図版1・8、第16図〕

範囲が狭小で、県道に接するため、全面的な発掘調査を実施することができず、トレンチを3箇所設定し土層の堆積状況を確認した。A・B区からつながるような水路の痕跡は検出できず、水路は現県道付近に重なっている可能性が高い。

C D 区〔図版1・2・8・9、第17図〕

現在、笹川集落内で確認することができる遺構は、砂金採掘最終段階のものであり、砂金採掘による大規模な地形の改変が想定され、当初の形状は想定することができない。調査地点も最終段階の地形である。D区は現県道より約5m高い位置にある平坦面であるが、ガラ石の堆積が著しく、立残山での砂金採掘に伴って取り除かれた比較的早い時期のものと考えられる。集落からの聞き取りによれば、同じ場所で繰り返し砂金採掘は行なわれ、そのたびにガラ石の移動が行なわれたという。現道との比高差は、砂金採掘で生じたものと考えられ、地形の改変の規模の大きさを想像することができる。

1) 砂金山〔巻頭図版1、第25図〕

D区に隣接して、砂金山立残山が位置している。西三川付近の江戸時代の絵図によれば、砂金山は掘り崩されているため、茶褐色の山として表現されている。また、砂金採掘が行なわれていない山は緑色で表現され、両者の相違は明確である。現在でも、虎丸山をはじめ、落葉後の冬期には数箇所のガレ場を確認することができる砂金山もある。地元では、五社屋山では山が1つなくなったなどの伝承が残り、相当な地形の改変が考えられる。今回の調査地点は砂金山立残山の稼ぎ場とそれに伴う水路と考えられる。立残山は現況では、南北方向に延びる標高172mのやせ尾根の丘陵である。頂上付近は幅1mを残して、砂金採掘のために掘り崩されており、北側の稼ぎ場に面した斜面は断崖を呈している。砂金山を山裾からどんどん掘り崩し、土を貯めた所に水路の水を流し、背後にガラ石の廃棄を行うという工程に伴う、稼ぎ場状況が確認できる。

西三川砂金山では山一つなくなるほどの砂金稼ぎが行われたという伝承が残るが、立残山はその名のおおりに、残されている状況が確認できる。意図的に残されたものなのか、結果として残ったのか判断が難しい。

砂金山の実態も絵図、史料からの調査、研究が進んでいるが、遺構としての現地調査はまだ行われていない。今後、地形の測量、地元の聞き取りを行い、砂金山本体の調査も進めていく必要がある。最終的な目標として砂金山、水路、堤、石組遺構の調査によって、砂金山による砂金採掘のシステムを解明していく必要がある。

2) 石積遺構〔図版1・2・9〕

平坦面南東側、傾斜に沿って自然石を積んだ遺構を検出した。長さ約4.2m、高さ約0.9mの規模を持つ。立残山丘陵部に延びる斜面の土止めのための石積と考えられるが、建設時期は不明である。

第V章 総 括

1 遺 構

今回の調査では、特にA区とD区においてガラ石の堆積が確認され、立残山での稼ぎ場跡の一部が検出された。また、江戸時代の西三川砂金山絵図にも描かれ、第一次・第二次調査で検出された水路遺構の延長と思われる部分が検出された。加えて、B区の北側で分布が確認されていた1基の石組遺構についても、今回実測調査を行った。

周知のカジ屋敷遺跡はA区の東側に隣接しているが、今回の調査により、その範囲はA区からC区にかけての一带に拡大すべきものと思われる。一方、周知のせりば遺跡はD区の南側に位置している。今回の調査によりその範囲はD区を含む部分にまで拡大すべきものと思われる。

2 各種資料から見た本調査区の歴史的位置付け

本調査区は、江戸時代に砂金採掘が行われていた立残山の直下に位置しており、今回の調査では、A・B区において、平成13・14年度の第一次・第二次調査で確認された石組水路の延長と想定される水路跡が検出された。このことは、砂金を含む山肌を崩し、長距離水路によって引いた水を流すことで砂金を回収するという、一連の採掘システムを解明する上で重要な意味があるものと考えられる。以下、現存する絵図や古文書などをもとに、今回の調査結果について考察する。

まず、立残山を稼ぐための水路・堤の仕組みについて考えてみたい。最も明解なのが、今回参照した6点の絵図である。このうち最古のものは、江戸時代中期頃と想定される真野地区真野新町の山本家が所蔵する「西三川砂金山全図」〔第19図〕と、新潟県立佐渡高等学校に保管されている『舟崎文庫』に所収されている「西三川砂金山絵図」〔第20図〕である。第19図では、立残山に至る水路は現真野地区豊田地内の「字高菅沢関口」から引いており、「青池」堤にいったん水が集められる（ここで「焼山」稼ぎ場の裏を通過して「赤池」堤に至る水路と分岐する）。以後「形吉山」稼ぎ場の前を通り、切貫（トンネル）をぬけて、絵図には記名がないが立残堤と想定される堤を経て、立残山の山裾の「丸塚堤」に至り、「水戸尻川」（現金山川）へ合流している。ここで注目されるのは「丸塚堤」で、本図以外の絵図や文献には見られない堤である。立残山を稼ぐためにごく短期間のみ機能していた堤と考えられるが、今回の調査では検出されなかった。第20図では、「字高菅沢関口」から「切貫四拾五間」までは前者とほぼ一致するが、「切貫四拾五間」をぬけた後の堤は「中立堤」と記されており、「丸塚堤」も描かれていない。また、「中立堤」から「新堤」や「山居平稼所」方面へ水路がもう一本引かれているという相違点がある。この「中立堤」は立残堤と同一の堤であると想定され、「山居平稼所」の砂金採取のため、「中立（立残）堤」の用水を利用していた時期があったものと考えられる。

その他の4点は、幕末から明治時代初期のものである。このうち年号が書かれているのは、天保14年（1843）の「笹川十八枚村本田畑・新田畑分布村絵図」〔第21図〕と、弘化3年（1846）の「西三川金山当時稼所墨引」〔第22図〕の2点である。第21図は、江戸時代笹川十八枚村の名主を勤めた金子家に伝存する『金子勘三郎家文書』（砂金採取方法や砂金山経営のあり方が記されており、平成2年〔1990〕に331点が旧真野町〔現佐渡市〕有形文化財に指定され、平成13年には資料目録〔佐渡金銀山遺跡調査検討準備会2004〕が作成されてい

る)に所収されている絵図で、天保14年段階の笹川集落周辺の田畑開発に関わるものであり、直接砂金採取とは関係ないが、稼ぎ場・堤・水路などが描かれている点で貴重な資料である。ここでも青池、切貫、「立残」堤、「立残」山を通過して水戸尻川へ至る水路が確認でき、特に立残山については、「當時稼所」と記されており、天保14年時点においても立残山が稼がれ、そこに至る水路・堤も機能していたことの証明となろう。また、第22図は江戸時代初期の有力山師である味方家に伝来する絵図で、古文書や伝来品と共に目録が作成されている[佐渡金銀山調査検討準備会2003・八木2006]。ここでは、青池や切貫は省略されているが、脚注に「青池江道立残用水也」とあり、第21図と同様に青池の水が立残山を稼ぐため用いられていたことがわかる。青池からの水路は「水溜場也」と書かれた堤(立残堤)を経て、「立残山」の前を通過して水戸尻川へ流れている。さらに「立残山」は「當時望稼所也」とあり、弘化3年当時も稼業していた稼ぎ場であった。「立残山」の前を走る水路の対岸には、「山小屋」と書かれた建物が記されており、平成14～16年の分布調査[山本・羽生・羽二生2004]で検出され、本調査のB区北東側に位置する住居跡や鍛冶小屋跡と想定される石組遺構との関連を想起させる。

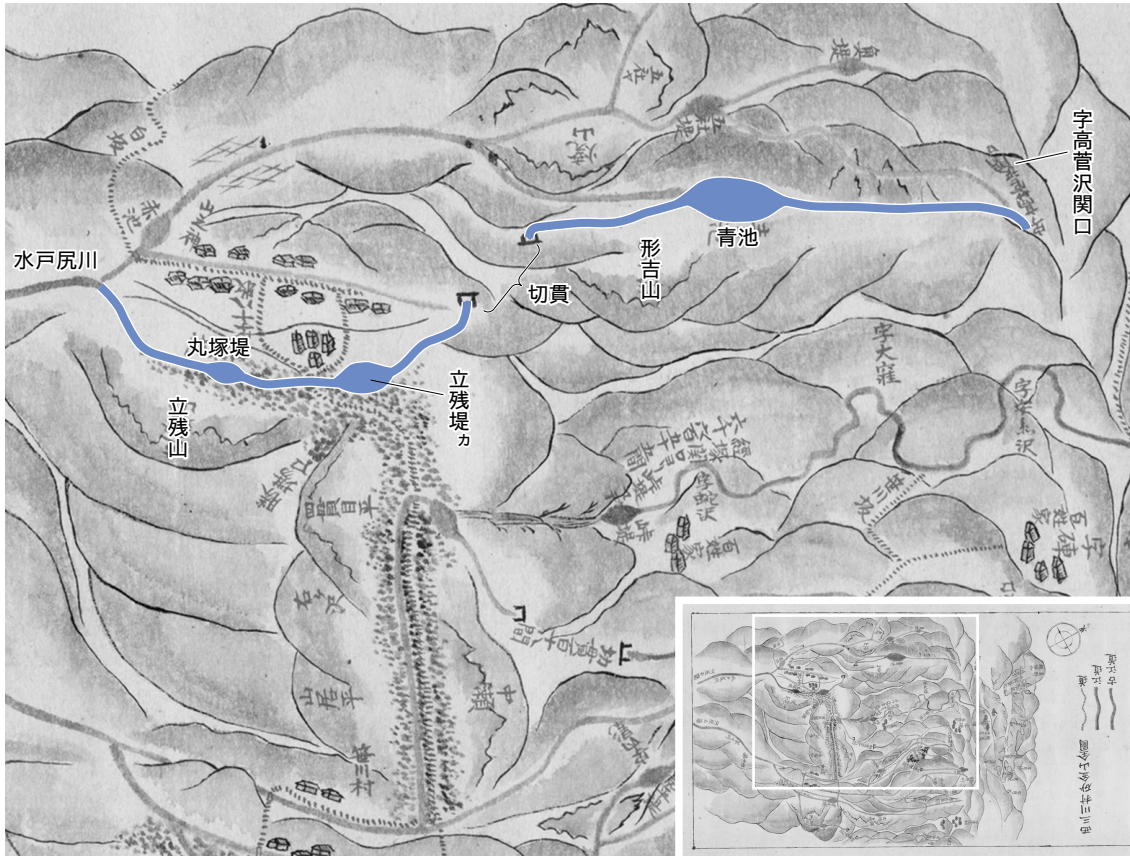
第23図・第24図はともに『金子勘三郎家文書』に所収されており、描かれている稼ぎ場や水路、堤の様子から、幕末から明治時代初期にかけての西三川砂金山の全景図であると想定される。第23図では、関口は描かれていないが、水路が「立残山用水青池」を通り、切貫をぬけて「立残山堤」に水が集められ、立残山の山裾を通過して水戸尻川へ続く様子が確認できる。「立残山堤」からは2本の水路が設けられ、「立残山」の麓で合流していることから、平成13・14年度の前回調査[堅木ほか2004]で検出された南水路と北水路に相当すると考えられる。第24図も水路は「砂金用水青池」、「五百二十五間之内四十五間山切貫」を通過して「立残山用水堤」へと至るが、第20図と同様にここで2本に別れ、1本は「砂金山峠坂山」の前を通過して「峠坂山用水路」(金山江)と合流して十五番川へ流れ、もう1本は「砂金山立残山」の麓を通過し、水戸尻川へ流れている。

これらのことから、時代によって砂金稼ぎ場・水路・堤の若干の変更はあるものの、基本的には「立残山」を稼ぐために、豊田地内の「高菅沢関口」より水を引き、「青池」堤でいったん貯蔵し、「切貫(45間)」を通過して「立残堤」で溜めた水を「水戸尻川」へ流すという技法が用いられていたといえる。

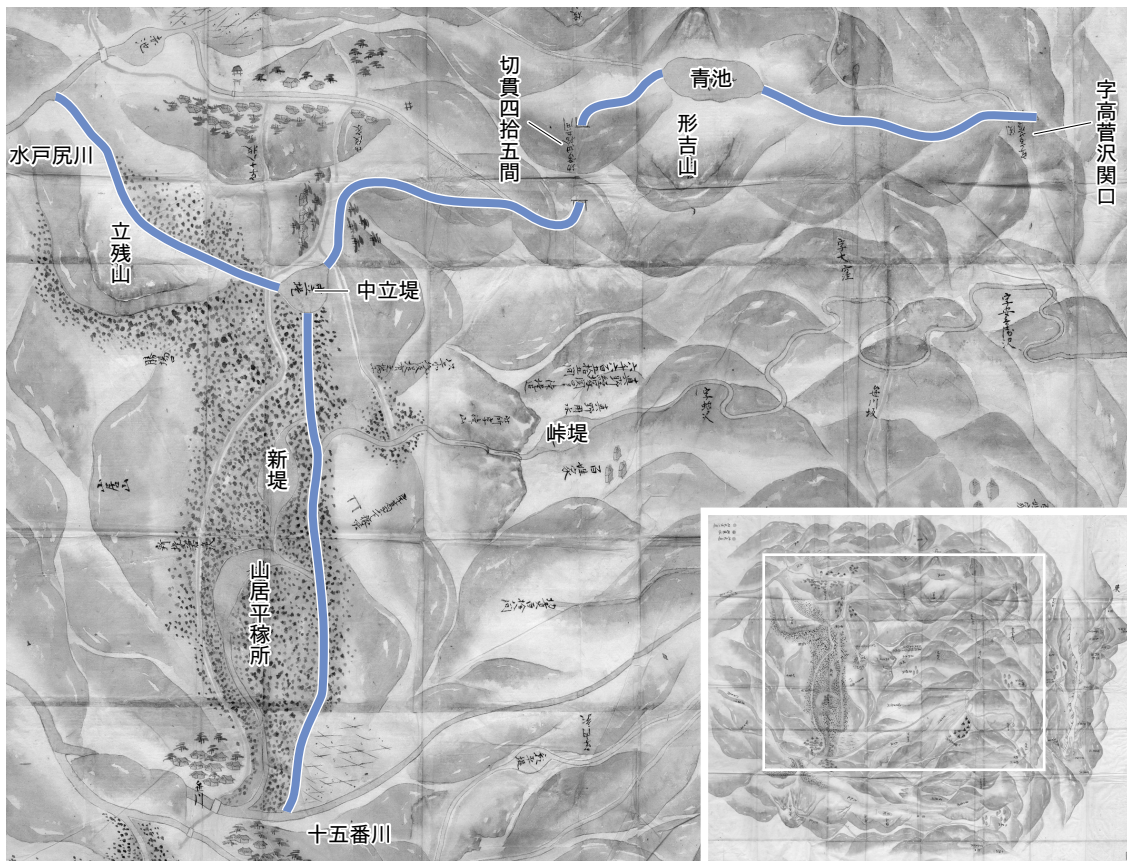
次に、文献史料からの考察を試みる。主なものに前述の『金子勘三郎家文書』と、『佐渡年代記』、『佐渡國史』、『西三川村誌』の4点があげられる。『佐渡年代記』は慶長6年(1601)から嘉永4年(1851)までの251年間の佐渡奉行所の記録を編纂したもので、江戸幕府の佐渡支配を知る上での根本史料である。『佐渡國史』は大正11年(1922)に佐渡郡役所から刊行された編纂書で、上古から明治末年までの佐渡の沿革・政教・鉱山の概況が掲載されており、今回は鉱山の西三川砂金山の部分を参照した。『西三川村誌』は昭和23年(1948)に金子家文書をもとに編纂された書物で、戦前の郷土史家の所見が記されている。金子家当主の勘三郎氏によると、戦後金子家に多くの歴史探訪者が訪れ、彼らに貸与して返却されないままの資料があるとのことで、失われた金子家文書を補完する意味でも貴重な資料であるといえる。以下、年代順に今回の調査に関連する稼ぎ場・水路・堤の変遷について考えてみたい。

『金子家文書』と『西三川村誌』には、「金山之内古稼跡」(史料一・二)として「立残山」を含むいくつかの稼ぎ場が記されている。このことは、明確な時期は不明であるが、古くから立残山が稼がれていたことを示すものである。注目すべきは史料二の立残山の解説で、「是ハ天明五巳年二月迄稼有之、但中立とも云」とあり、天明5年(1785)年2月まで稼ぎ場として機能していたことと、「立残」は別名「中立」とも呼ばれていたことがわかる。

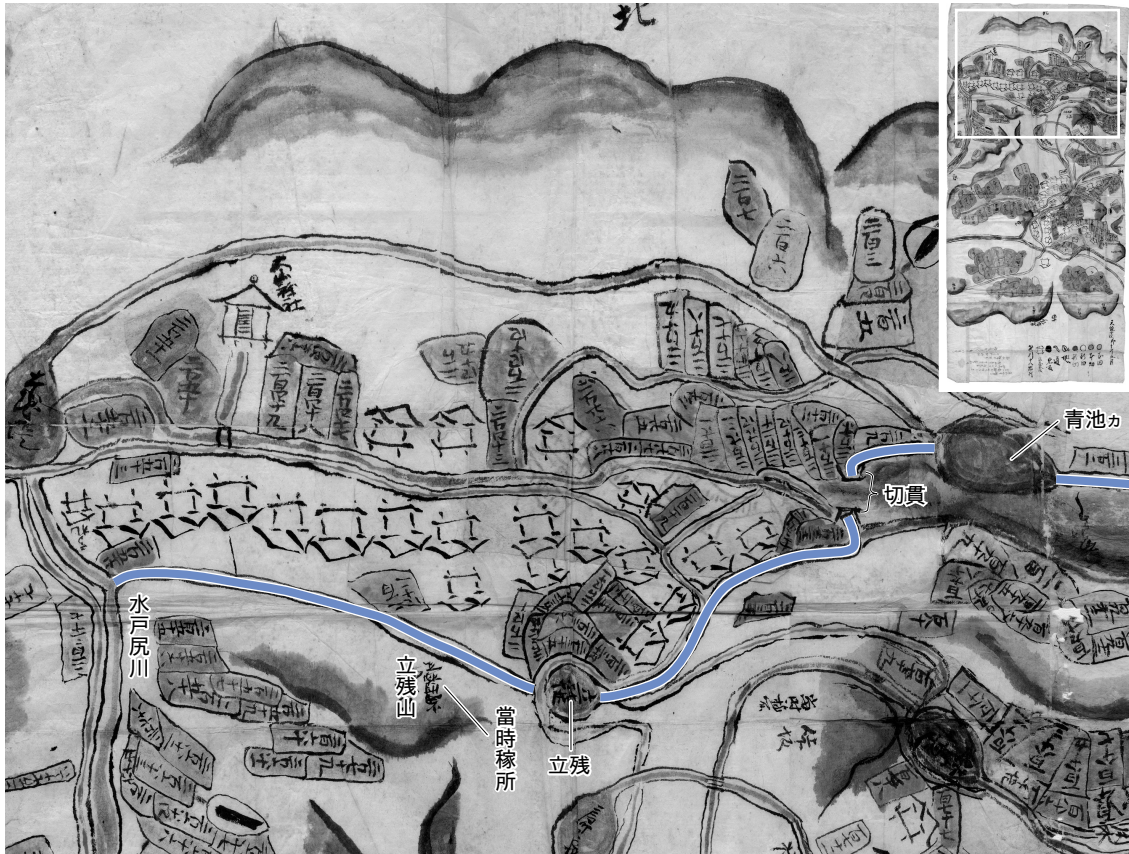
2 各種調査から見た本調査区の歴史的位置付け



第19図 立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図〔西三川砂金山全図〔山本家所蔵〕(第26図)に加筆〕



第20図 立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図〔西三川砂金山全図〔舟崎文庫〕(第27図)に加筆〕



第21図 立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図

〔天保14年（1843）笹川十八枚村 本田畑・新田畑分布村絵図〔金子勘三郎家文書〕（第28図）に加筆〕

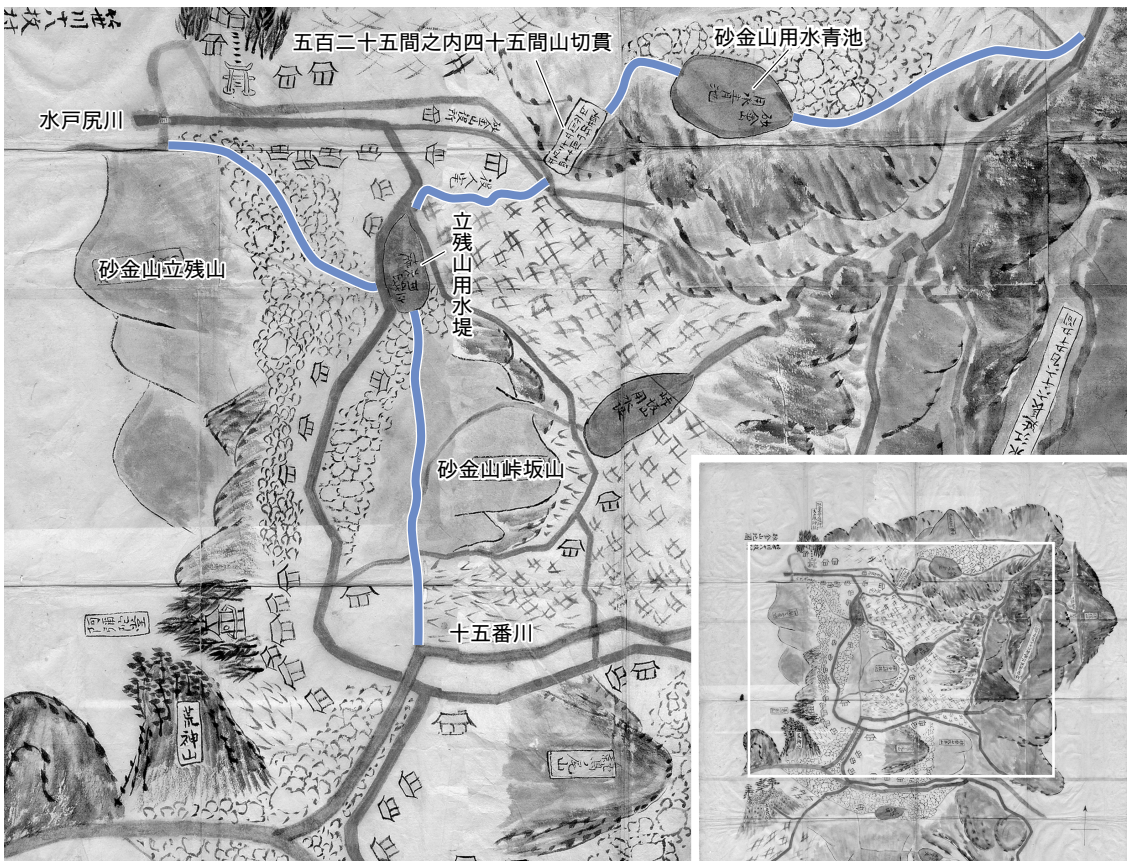


第22図 立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図〔弘化3年（1846）西三川金山当時稼所墨引〔味方家寄託資料〕（第29図）に加筆〕

2 各種調査から見た本調査区の歴史的位置付け



第23図 立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図〔笹川十八枚村砂金山絵図〔金子勘三郎家文書〕(第30図)に加筆〕



第24図 立残山稼ぎ場関連水路・堤位置図〔笹川十八枚村砂金山地図〔金子勘三郎家文書〕(第31図)に加筆〕

○史料三 「砂金山御稼所堤江道間数覚」『金子勘三郎家文書』（寛保元年 [1741]）

稼所名	堤名	長さ・幅・深さ（間・間・尺）	水路の長さ	備考
立残山	青池	60・18・不知	193間（青池尻より切抜口まで） 45間（切貫の内） 287間（切貫口より立残堤頭まで） 270間（堤下より立残水戸尻まで、内40間稼所）	193間 + 45間 +287間 =525間
	立残堤	15・8・7		

○史料四 「砂金山御稼所堤江道間数」『西三川村誌』（寛保元年 [1741] 七月）

稼所名	堤名	長さ・幅・深さ（間・間・尺）	水路の長さ	備考
立残山	青池	60・18・不知	525間（堤より立残堤まで）	
	立残堤	15・8・7	270間（堤より水戸尻まで）	

○史料六 「砂金採掘の場所」『西三川村誌』（天明4～6年 [1784～86]）

稼所名	所在地	1ヶ月請負高	請負者	備考
立残山	小立村	砂金15匁5分	かなこ4丁	これは不景気に付き、天明5年（1785）成由山へ立替り相願い、願の通り仰せ付けられこれ有り、当時御休山

○史料九 「当時相用候稼所堤江道間数之事」『金子勘三郎家文書』（年代不詳）

稼所名	堤名	長さ・幅・深さ（間・間・尺）	水路の長さ	備考
立残山	青池	60・18・不知	青池関口より立残堤まで525間 内45間は山切貫水通し申し候	
	立残山堤	15・3・6		

○史料十 「堤及び江道」『西三川村誌』（年代不詳）

稼所名	堤名	長さ・幅・深さ（間・間・尺）	水路の長さ	備考
立残山	青池	60・18・不知		昔古より妖怪の事これ有る旨申し伝う
	立残山堤	15・3・6	525間（青池関口より堤まで、内45間は切貫水通）	当時立残山御休山に付き、中柄山に相用い申し候

第4表 立残山稼所堤・江道一覧表

年代が判明している史料で最も古いものは、寛保元年（1741）当時の稼ぎ場・堤・水路を記した「砂金山御稼所堤江道間数覚」（史料三・四）である。ここでは、「立残山」を稼ぐために「青池」と「立残堤」を利用したこと、青池から水戸尻川までの水路の長さや堤の規模が記されている。史料三からは青池から切貫まで193間（約347m）、切貫内は45間（約81m）、切貫の出口から立残堤まで287間（約516m）、立残堤から水戸尻川まで270間（約486m）あり、この間に40間（約72m）の立残山稼所があったことが読みとれる。史料四にも、青池から立残堤まで525間（193間+45間+287間）、立残堤から水戸尻川まで270間であることが記されている。このことから、絵図にみえる「高菅沢関口」から「青池」までの水路の状況は不明であるが、少なくとも「青池」から「切貫」をぬけて「立残堤」に至り、「立残山」の前を通過して「水戸尻川」へ流れるルートは、寛保元年の段階には確立していたことが推測される。なお、『佐渡國誌』には延享年間から寛延年間当時（1744～51）の稼ぎ場・堤が掲載されており（史料五）、「中立山」・「立残山」がこの時点でも稼がれていたこと、「青池堤」・「中立（立残）堤」が使用されていたことがわかる。

史料六は『西三川村誌』の註に「此の書は天明四年より六年までの間に書いたものと見える」とあり、天明4～6年（1784～86）当時の砂金稼ぎ場の状況を記したと想定されるものである。これは『金子勘三郎家文書』では未確認の史料で、『西三川村誌』によって補完することのできる貴重な記述である。ここでは立残山について、「是ハ不景氣ニ付、天明五巳年成由山へ立替り相願、願通被仰付有之當時御休山」としており、天明5年当時砂金の出が悪いので「成由山」へ稼ぎ場を替えたことにより休山となっている内容が記されている。また、史料七・八にはその経緯が書かれており、「現在の稼ぎ場である中立・中柄・立残の三山は掘り尽くしてしまったので、虎丸・鶴峠・杉平・成由の四山（を替え山とすること）のほかに、中平・中柄二山の前面（のガラ石）を取除いて、水路を付け替えて砂金稼ぎを継続することにした」とある。「成由」「中平」「中柄」は文献のみ確認できる稼ぎ場名であるが、「成由」は第19・20図の「形吉山」、「中

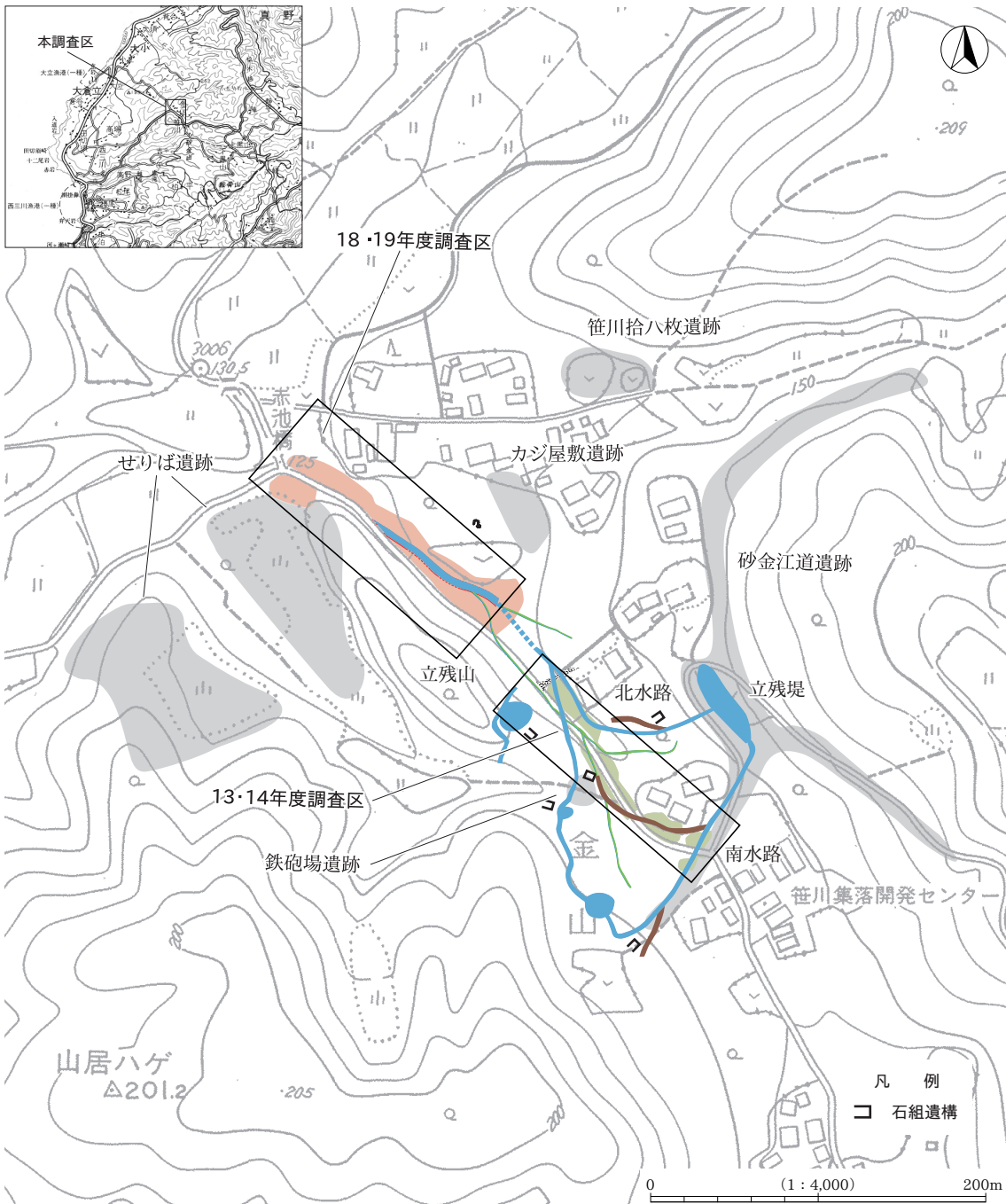
2 各種調査から見た本調査区の歴史的位置付け

平」は立残山の裏手の山、「中柄」は「立残堤」と「十五番川」の間に展開する「中瀬」「山居平」といった稼ぎ場の総称に該当するものと想定される〔小菅1988〕。ここで重要なのは、「中平・中柄二山の前面のガラ石を取除いて水道を付け替えた」ことである。天明4～6年頃の笹川集落周辺では、砂金産出量の急激な減少により、これまでの採掘で貯まったガラ石の山を取除いて新たな稼ぎ場を構築するという、いわゆる「取明普請」が盛んに行なわれていた。史料九・十はともに天明5年頃の立残山堤の規模と水路の状況を記していると想定される史料で、史料三・四とほぼ同一の内容であるが、立残堤から水戸尻川間の水路の間数が書かれていない。さらに史料十には、「是は當時立残山御休山に付、中柄(柄)山に而相用申候」とあり、立残山が休山していたことから青池～立残堤間の水路を転用して中柄山を稼いだことが述べられている。また、第20図において、「中立(立残)堤」から「新堤」「山居平稼所」といった中柄山方面へ水路が伸びていることは、天明5年の中柄山前面の取明普請を反映して描かれたことを示すものであり、第19図は天明5年以前、第20図は天明5年以後という時期差を指摘することができるものと考えられる。

最後に、江戸時代後期から幕末にかけての立残山の状況についてである。史料十一には「立残山南北柄山ヲ除キ、川床地盤ヲ掘リ、土居瀬下ロシスルコトニ定メ」とあり、文化12年(1815)に立残山の取明普請が行なわれたことがわかる。また、文政6年(1823)にも、虎丸山とともに立残山の取明普請が実施されたことが記録に残る〔史料十二〕。これにより、立残山の前面のガラ石は取除かれ、その下の地面も掘り下げられていった。第19図にみえる「丸塚堤」も、こういった取明普請の繰り返しによって失われたと想定される。

史料十三～十六は幕末の状況を示しており、嘉永3年(1850)、立残山・峠坂山・中瀬の取明普請に着手し〔史料十三・十四〕、翌4年に完了したとある〔史料十五・十六〕。この中で、「立残山并中瀬取明其外所々堅固に水引方等御普請」〔史料十三〕と、「中瀬ノ開掘用水通等」〔史料十六〕が行われており、中瀬を稼ぐために相当大規模な水路工事が実施されたと想定される。幕末から明治初期の第21～24図を比較すると、第24図のみ立残堤から峠坂山・中瀬稼ぎ場方面に延びる水路が確認されることから、第24図は嘉永3～4年の工事以後の絵図であると考えられる。また、これ以後、明治5年(1972)の閉山まで取明普請の記録はないことから、今回検出された水路遺構は、この時の工事で構築された水路の痕跡である可能性が高い。こうしたたび重なる取明普請によって、立残山の前面は現況に近い沢状地形になっていったものと推測される。

以上のことから、立残山を稼ぐための水路は真野地区豊田地内の高菅沢関口を水源とし、青池から水戸尻まで延べ795間(約1,431m)に及び、少なくとも寛保元年(1741)の段階で確立していたことが確認できた。また、立残山は比較的初期の段階の稼ぎ場であったため、金の産出量が落ち込んだ天明5年(1785)に一時休山となり、その間立残山の用水は中柄山を稼ぐために転用されていたものの、その後復旧し、少なくとも文化12年(1815)、文政6年(1823)、嘉永3～4年(1851～52)の3回の取明普請が行なわれたことが証明された。今回検出された水路遺構は、嘉永3～4年に設営された水路の一部であると想定され、砂金採掘によって出た余分なガラ石を取り除いて、さらにその下の地面を掘り下げ、水路を再構築して砂金を回収するという、取明普請の最終形態にあたるものといえる。立残山周辺には、砂金採掘のための水路・堤・石組遺構や、砂金採掘によって堆積したガラ石などが良好な形で残っており、一連の砂金採掘システムを解明するための重要な位置を占めるものと考えられる。



第25図 水路・堤推定図

3 推定される水路位置と今後の課題

今回の調査により、A区において立残堤から続く水路の最終部分の一部を確認することができた。西三川砂金山絵図との対比では、その水路がB区からC区にかけて延びていたと考えられるが、明確な遺構としては検出することができなかった。江戸期における砂金山の操業当時も、水路法線は稼ぎ場の位置によって随時変更されていたと考えられ、加えて近代以降に進んだ県道工事等の諸開発により、分断されていることも想定される。特にB区の県道側斜面については、調査前には杉林であったが、戦後畑地として利用されていたこともあり、改変されている可能性がある。C区周辺を通っていた水路は、現在の県道法線と重なることも推定される。

第一次調査から今回の第三次・第四次調査までを含め、立残山周辺での水路跡や鍛冶小屋跡、道路状遺構等を確認することができた。西三川砂金山絵図に描かれた水路は数多い。本格的な発掘調査の実施は困難であるが、分布調査や地上に残る水路・堤遺構の精査等、地道な調査研究を続けていくことにより、西三川における砂金採掘の実態解明が進み、研究者はもとより、住民・市民にとっても砂金山遺跡の理解が進むことを大いに期待している。また、数ある砂金山絵図の対比や文書資料の分析により、西三川における砂金採掘の推移や集落構造、地形の変遷をたどる研究も今後更に進める必要があると思われる。

引用・参考文献

- 相川郷土博物館 1997 『佐渡の金銀山－開館40周年記念特別展報告書2』 相川郷土博物館
- 足利健亮 1971 「国府と郡家」『佐渡の歴史地理』 古今書院
- 今井法二^{ほか} 1968 『佐渡国府緊急調査報告書』1 真野町教育委員会
- 岡本 勇^{ほか} 1969 『佐渡藤塚貝塚』 真野町教育委員会
- 小熊博史・立木宏明 1998 「佐渡島における縄文時代草創期の遺物」『新潟考古』第9号 新潟県考古学会
- 堅木宜弘 1999 『滝脇城跡』新潟県佐渡郡真野町大字滝脇字城ヶ上滝脇城跡緊急発掘調査報告書 真野町教育委員会
- 堅木宜弘^{ほか} 2004 『鉄砲場遺跡・砂金江道遺跡』一般県道静平・西三川線道路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 真野町教育委員会
- 金沢和夫・山本 仁 1960 「真野・畑野周辺の総合調査について(2) 真野町庚門塚の発掘」『佐渡博物館々報』第5号 財団法人佐渡博物館
- 川村 尚^{ほか} 2005 『小泊窯跡群Ⅰ』 佐渡市教育委員会
- 川村 尚^{ほか} 2008 『佐渡国分寺跡発掘調査報告Ⅲ』伽藍周辺の調査 佐渡市教育委員会
- 神蔵勝明・小林巖雄 1993 「佐渡の自然誌 第五章 佐渡の生い立ち(地質)Ⅱ金鉱床のできかた」『図説佐渡島自然と歴史と文化』 財団法人佐渡博物館
- 木村康裕^{ほか} 1995 『羽茂町内遺跡確認調査報告書Ⅱ－小泊窯跡群』 羽茂町教育委員会
- 木村康裕^{ほか} 1996 『羽茂町内遺跡確認調査報告書Ⅲ－小泊窯跡群』 羽茂町教育委員会
- 小菅徹也 1988 「西三川砂金山の歴史地理」『地質ニュース』407号 科学技術社
- 小菅徹也 2000 「佐渡西三川砂金山の総合研究」『金銀山史の研究』 高志書院
- 佐渡市教育委員会 世界遺産・文化振興課・新潟県教育庁文化行政課 2008 『黄金の島を歩く－佐渡金銀山の歴史と文化－』 新潟日報事業社
- 椎名仙卓 1959 「軍・団の墨書土器をめぐって－雑太軍団の所在地に関する問題－」『佐渡博物館々報』第三号 佐渡博物館
- 島根県教育委員会 1999 「第2章 歴史」『岩見銀山遺跡発掘調査報告1－平成5～10年度調査・石銀地区－』
- 関雅之・本間信明 1975 『浜田遺跡』 真野町教育委員会
- 橋 正隆 1964 『川崎村史料編年志－佐渡島中世までのおいたち』上巻 両津市河崎公民館
- 戸根与八郎^{ほか} 1994 『羽茂町内遺跡確認調査報告書Ⅰ－小泊窯跡群』 羽茂町教育委員会
- 中原功志 2004 「第一章 自然編 第一節 地形及び地質」『真野町誌 近代編』真野町誌編纂委員会
- 新潟県立佐渡高等学校同窓会 1986 『佐渡國略記』上・下 新潟県立佐渡高等学校同窓会
- 新潟古砂丘グループ 1987 「佐渡島の砂丘－新砂丘と古砂丘」『佐渡博物館研究報告』第9集 佐渡博物館
- 新穂村史編さん委員会 1976 「銀山と港」『新穂村史』 新潟県佐渡郡新穂村
- 本間周敬 1948 『西三川村誌』 西三川村役場
- 本間嘉晴^{ほか} 1969 『佐渡国府緊急発掘調査報告書(若宮遺跡)Ⅱ』 真野町教育委員会
- 本間嘉晴^{ほか} 1977b 『竹田沖条里』 真野町教育委員会・畑野町教育委員会
- 本間嘉晴^{ほか} 1977c 『下国府遺跡』 真野町教育委員会
- 本間嘉晴^{ほか} 1978 『竹田沖条里』 畑野町教育委員会・真野町教育委員会
- 本間嘉晴^{ほか} 1989 『藤塚貝塚』 真野町藤塚貝塚発掘調査団
- 真野町史編纂委員会 1976 『真野町史』上巻 真野町教育委員会
- 矢野牧夫 1989 「Ⅱ-3(2) 渡島半島における砂金採取のあゆみ」『今金町美利河1・2砂金採掘跡』 財団法人北海道埋蔵文化財センター
- 山本 仁 1960 『佐渡の古城址』1 佐渡文化プリント社
- 山本 仁 1961 『佐渡の古城址』2 佐渡文化プリント社
- 山本 仁^{ほか} 1985 『洪手城址』新潟県佐渡郡真野町大字豊田洪手城址緊急発掘調査報告書 真野町教育委員会
- 山本 仁^{ほか} 1988 『吉岡城跡(二ノ城跡)』 真野町吉岡城跡発掘調査団・真野町教育委員会
- 山本 仁^{ほか} 1994 「雑太城跡確認調査の概要－1989－」「雑太城跡確認調査の概要(2)－1991－」「吉岡城跡確認調査の概要－1993－」『発掘調査の概要Ⅰ』 真野町教育委員会
- 山本 仁^{ほか} 1996a 『仲畑遺跡』発掘調査の概要Ⅱ 真野町教育委員会
- 山本 仁^{ほか} 1996b 『経ヶ峯窯跡』 真野町教育委員会
- 山本仁・羽生令吉・羽二生正夫 2004 『西三川砂金山石組遺構調査報告書』 佐渡市教育委員会
- 山室恭子 1992 『黄金太閤 夢を演じた天下びと』 中央公論社
- 若林篤男 2004 『史跡佐渡国分寺跡周辺確認調査報告書 佐渡国分寺Ⅰ』 佐渡市教育委員会
- 若林篤男 2005 『史跡佐渡国分寺跡周辺確認調査報告書 佐渡国分寺Ⅱ』 佐渡市教育委員会

要 約

カジ屋敷遺跡・せりば遺跡

- 1 カジ屋敷遺跡は新潟県佐渡市西三川字カジ屋敷240番地他、せりば遺跡は西三川字せりば391番地他に所在する。遺跡は真野湾から内陸に約3kmの小佐渡丘陵に位置し、立残山に隣接した標高約130mに所在する。西三川砂金山(笹川地区)の関連遺跡の中では北辺に位置する。
- 2 発掘調査は、一般県道静平西三川線改良工事に伴い佐渡市教育委員会が調査主体となり、平成18・19年度に実施された。
- 3 平成13～14年度にかけて、同事業に伴う別地点の発掘調査(第一次・第二次)が実施され、近世の砂金山における鍛冶小屋跡や水路跡、道路状遺構が検出されている。本調査区(A区・B区)はその北西側に隣接しており、北東側でカジ屋敷遺跡に接している。
- 4 今回の調査において、第一次・第二次調査で検出された石組水路の延長部分と考えられる水路跡が検出された。この水路跡は、史料調査の結果、真野地区豊田地内を水源とし、全長1.4km以上に及ぶことが判明した。さらに、嘉永3～4年(1851～1852)に設営された水路の一部で、採掘時に出たガラ石置き場の下部を掘り下げて砂金を回収するという、「取明普請」の最終形態にあたと想定される。
- 5 II F1グリッドに位置する砂金採掘当時の鍛冶小屋跡の可能性のある石組遺構1基の実測調査を実施した。
- 6 せりば遺跡のD区でも立残山操業時のものと思われるガラ石の堆積が検出された。
- 7 遺物は出土しなかった。
- 8 水路跡の検出やガラ石の堆積状況から、周知のカジ屋敷遺跡とせりば遺跡の範囲が、今回の調査区を含む部分にまで拡大することが明らかとなった。

Abstract

Kajiyashiki remains and Seriba remains

1. Kajiyashiki remains and Seriba remains are both in Nishimikawa of Sato City, Niigata Prefecture; the former is located at 240 Aza Kajiyashiki and the latter is at 391 Aza Seriba. They are set in the Kosado hills, approximate 3km inland from the Mano bay. The locations are approximate 130m up in the hills adjacent to Tatenokoriyama. They are on the northern rim of the region related to the remains of Nishimikawa alluvial gold deposits (in Sasagawa district).
2. Excavation activities were done by a research body led by Sado City Board of Education in 2006 and 2007 (fiscal years). The activities were associated with roadway improvement of the route Shizudaira-Nishimikawa.
3. The roadway improvement rendered other excavation activities in 2001 and 2002 (fiscal years); they were designated as the first and the second researches. These activities discovered remains of a blacksmith's workshop, waterways and roads for alluvial gold mines in the modern ages. The region (A and B sections) of this research adjoin the regions surveyed by the first and the second researches on the north west side and Kajiyashiki remains on the north east side.
4. This research discovered waterway remains that are considered to be an extension of the rock work waterway discovered by the first and the second researches. It was discovered based on the investigation of historical materials that the waterway remains had the water source in Toyota of Mano district and the overall length of 1.4km or longer. Furthermore, it was assumed that the remains were a part of the water way established in 1851 and 1852 (the 3rd and 4th of Kaei) and the final form of "Toriake Fushin" which means "digging up a tunnel after it was blocked due to falling" in order to collect alluvial gold through a process digging down the bottom part of the storage site for crushed stones from mining.
5. A measurement survey of a set of rock work remains located in the IIF1 grid was done. It can be a blacksmith's workshop at the time of placer mining.
6. Remains of another rock work (accumulated crushed stones) that seems to have been used at the time of placer mining were also discovered in the section D adjacent to Seriba remains.
7. Not a relic was discovered.
8. Judging from the fact that remains of the waterway was discovered and the accumulated conditions of crushed stones, we can conclude that the scope of the known Kajiyashiki remains and Seriba remains should be extending over the region that including this research area.